魔法戦記ガンダムUC

ＮＴ－Ｄ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法戦記ガンダムＵＣ

【Ｎコード】
Ｎ０４９８Ｔ

【作者名】
ＮＴ－Ｄ

【あらすじ】
『ラプラス戦争』……それは、開ければ地球連邦政府を転覆させると言われる禁断の箱、『ラプラスの箱』を巡る戦争。
だが、『ラプラスの箱』は１つだけでは無かった。
魔法で世界の平和を維持する巨大組織『時空管理局』。
彼らが存在する世界にもう１つの箱があった。
禁断の箱を巡る戦乱、そして新たなる箱の守護者と少女達の出会いが、世界の運命を変える。
（この作品は、オリジナル要素があり、『ＩＦ』の歴史を描いた作

品です。苦手な方は戻るをお願いします）

文章力も無い未熟者ですが、これから宜しくお願いします。
アドバイスや誤字脱字などのご指摘を頂けると嬉しいです。
書き直した物には（改）マークが付いています。

プロローグ（前書き）

未熟者ですが、これから宜しくお願いします！

プロローグ

平凡で何事も無いある日の午後、いつもの様にテレビからはニュースが流れていた。

『――被告は、関税の1割を横領した疑いがあり、これに対して警察は――ッ』

テレビの電源が落とされ、ニュースは途絶えた。

「……」

近くのテーブルで本を読んでいた青年は、リモコンを置いて本に意識を向ける。

パタッ

青年は本を閉じた。だが、その表情は明るいとは言えなかった。

「はぁ……何でデカイ組織ってのは、こうも腐ってやがるんだ……」

無気力と失望の様な感情が入り雑じった言葉を吐き捨て、本を置いた。

すると、ポケットの中の携帯からバイブを感じ、取り出だ。友達からの電話の様だった。

「……もしもし」

≪よう、龍聖。今日飲みに行かないか？≫

その言葉に、龍聖と呼ばれた青年は詰まらなそうな表情をした。

「ゴメン、今日はそんな気分じゃないんだ。……また今度な」

そう言って電話を切った。

「……少し出掛けるか」

龍聖は、上着を着て家を出た。静かになった部屋の窓辺には、純白のボディに一本角を生やしたプラモデルが、窓からの日差しに輝いていた。

龍聖は空を眺めながら街を歩いていた。

「……（何故こうも世界は腐っている？……何が腐らせているんだ？……人の欲望か……？それともエゴか……？）」

そして、ふと前を見ると、1人の子供が道路に飛び出していた。その先には大型トラックが迫る。

「ッ！！」

無意識の内に走り出していた。そして子供を歩道に突飛ばし、振り向くと……

ドンッ！！

体に大きな衝撃と、飛ばされる感覚を感じる。

「（……終るのか……俺は……）」

そこで意識は途絶えた…

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ１　白き一角獣　（改）（前書き）

第１話～第５話を再編集して書き直しを行いました。
ストーリーの大筋は変わっていませんが、書き方と細部を変更しました。

今後は、このやり方で書いて行くつもりなので、宜しくお願いします。

後書きと活動報告に重要事項が書いてありますので、そちらも宜しくお願いします。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ１　白き一角獣　（改）

『……聖……龍聖……』

誰かの声が、龍聖の頭に響く。彼の名を頻りに呼んでいる様だ。

「う……誰だ？……俺は　……死んだのか…？」

龍聖が目を覚ますと、何も無い真っ暗な空間と自分がそこに浮いているのが解った。

体の感覚の方は、何だか妙に脱力感があり、ぼやけた様な感覚だった。

その為動かす気力も無く、ただ横たわる様に浮かんでいるだけだった。

この感覚は、お世辞にも天国へ来たとは思えず、寧ろ地獄だと思えた。

だが、自分を呼ぶ声は続いており、此方が答えるのを待っている様だった。

「……地獄とは随分暗いんだな……。それと、誰だか知らないけど、死人に何の用だい？」

『……いや、汝はまだ死んではおらぬ。……汝は今、生と死の境にいる。汝に問う……今一度、生きたいか？』

「どう言う意味だ？」

自分の死を否定され、龍聖は顔を顰める。そして、声の言っている意味が解らず、彼は首を傾げた。

『我は……汝を新なる箱の担い手に選んだ』
「箱の……担い手？」
『汝は幼き命を救った。己の命を掛けて……よって、汝が箱の守護者に相応しいと考えた』
「待て、勝手に決めるな。お前は一体誰だ？何故俺なんだ？」

声しか聞こえず、姿を見せない相手を龍聖が信用するはずが無かった。
それに、子供を助けて死に掛けている自分が何故選ばれたのか、理由が納得できなかった。

『我は箱の管理者。故に体は存在しない。我は、汝の中に宿る可能性を見た。汝ならば、箱を守れると確信した』
「俺の、可能性……？それに、箱とは何だ？」
『…ラプラスの箱』

龍聖の表情が驚愕へと変わる。
［ラプラスの箱］は彼にとって、物語の中に登場する架空の存在なのだ。その架空の存在を守れと言われた所で、龍聖は簡単に承諾できる訳が無かった。

「なっ！？ラプラスの……箱……？バカな、あれは架空の存在だ」
『架空では無い。世界は1つでは無い、世界は無数に存在する。可能性の世界が……故に、箱も可能性の1つだ。無論、汝も可能性の1つ……』
「俺も……可能性の……1つ？」
『汝に託す我の願いは1つ。汝は箱の守護者と成りて、とある世界を本来［在るべき姿］へと戻す事……。その為に、汝に新な命と力を与える』

「新な命と力……？」
『箱の鍵たる［可能性の獣］の力を与える。汝の生きる為の力となるであろう。我は今一度問う……御劔龍聖、汝は生きたいか？』
「俺は……」

龍聖は考える。このまま死んで良いのかと。
確かに、死ねば自分が嫌いだった腐った世界とはお去らばできる。未練なんて無い。
力も無く、1人で何か行動を起こしたとしても、過去の偉人の様に革命を起こす事など易々とできる訳が無い。世論が受け入れなければ、只の犯罪者として名が残るだけだろう。

特にやる事も無く、ただ状況に流されるままに生きるだけならば、誘いを断りこのまま死んでも良いのではないか？

だが、本当にそれで良いのか？これが本当に自分の望んだ人生なのか？
龍聖は自分の心に問う。
心を研ぎ澄まし、その中から導き出された答えは……『違う』であった。本当に望んだ人生は、こんな物ではないと…。
もし、新な人生を得られるのならば、自分自身も新な生き方をする事ができるかもしれない。

自問自答の末に、龍聖が導き出した答えは……

「俺は……生きたい」
『良いのか？』
「何でだろうな……お前が嘘を言ってるとは思えないんだ。だから……俺はお前を信じる（それにこの声、誰かに似ている気がする。誰だ……？）」

これは、直感で感じた事でもある。新な人生以前に、人を信用できなくなっていた自分が、この声に対しては警戒心が和らいで行くのが解った。
この声に聞き覚えがある、そんな気がするのだ。だが、誰の声なのかまでは確かめる術は無かった。
だからここは心に従い、信じる事にしたのだ。

『感謝する。我、ラプラスの名の下に、汝に新なる命と力を与える』

すると右腕が輝き出し、何かが装着された感覚がした。それは、白銀のブレスレットだった。中央には、一角獣の紋章らしき型をした赤い宝石が埋め込まれている。

「これが、俺の力になるのか……なあ、［とある世界］って言ってたけど、行き先はどこなんだ？」
『お前のパートナーに聞くが良い……では、箱を頼む。そして、世界を…』
「えっ？おい、それってどう言うk」

言い終る前に、意識は途絶えた。

―龍聖Ｓｉｄｅ―

「……うぅ。ここは、どこだ？」

俺が目を覚ますと、そこは森の中だった。頭はまだボンヤリしているけど、取敢ず立ち上がって回りを見渡した。

結構深い森らしく、どちらを見ても木ばかり。視界はとても良いとは言えなかった。

おまけに、人の気配も動物の気配も無く、遠くで鳥の鳴き声が聞こえるだけだった。

それに、１つ気になる事があった。

「俺は……本当に生きているのか？」

体は何とも無く、痛みを感じる事は無かった。

トラックに跳ねられたのだから、無傷で済む訳が無い。多くの場合は死んでいるし、例え生きていたとしても内臓や骨に相当なダメージが行く筈だ。

だけど何とも無い。試しに頬をつねったら痛かった。夢ではなく、あの声の言った通りに、俺は新な命、そして人生を得たのだと実感できた。

だけどあの声の言った通りなら、俺は別の世界に来た事になる。

ここは、一体どこなんだ……？

［お目覚めですか？マスター］

俺は突然の声に驚き、辺りを見回した。だけど誰もおらず、気配すら無かったから、俺は空耳かと思ってしまった。

［ここです］

今度は右腕からハッキリ声が聞こえた。
まさかと思いつつ、俺は恐る恐る声を掛けた。

「……まさか、お前？」
［はい。私はマスターのデバイスです］

声の主は、右腕のブレスレットだった。
でも、俺がマスター？それに、デバイスって何だ？
ブレスレットが喋った上に、行き成り訳の解らない事を言われて、
俺は頭が少し混乱した。

［デバイスとはマスターと共に歩み、サポートしていくＡＩ。別な
言い方をすれば、私はマスターのパートナーです］
「パートナー？……じゃあ、あの声が言っていた俺のパートナーって
て、お前の事だったのか？」
［はい］

俺は少々信じられなかった。自立型ＡＩなんて、ＳＦやアニメ等
の空想上でしか見た事が無い。
特に自我を持ち、言葉を話すＡＩなど…。

だが、それよりも聞きたい事があった。
ここが一体どこなのかだ。

［ここは『ミッドチルダ』です］
「ミッド、チルダ？」
［はい。ここ…マスター！敵です！］

ＡＩの言葉と、俺も気配を感じて振り向くと、木の陰からカプセルの様な型や球体の型をした大型ロボットが多数現れた。
どれも見た事の無いロボットだった。
何なんだ……？こいつらは……？

［こいつらは、ガジェットドローンと呼ばれる自立型の魔導兵器です］
「ガジェット、ドローン……？魔導、兵器…？」

俺には言っている事が解らなかった。
『ガジェットドローン』は、恐らくあのロボット達の名前。だけど、ＡＩの言った『魔導兵器』とは何だ？まさか魔法とか言うんじゃないだろうな？ファンタジーじゃあるまいし。

だが、それ以前に俺は囲まれている。
こいつらは敵なのか？

［マスター、ロックオンされています］

ロックオン！？そんな！
……でも、俺も何となく解った気がする。ロボットから感じるこれが、ロボットの放つ殺気なんだと…。
つまり、このロボット達は俺を殺そうとしている。
でも何故だ？俺が何かしたのか？

だけど、それ以前にこの状況をどう打開すれば良い？このまま黙って殺されろと言うのか？訳の解らないまま……何もできないまま……。

［私の名を呼んで下さい］

「え…？」
［私は貴方の力。だから呼んで下さい。貴方の内なる神を、可能性の獣の名を］

……そうだった。こいつは俺の力であり、パートナーなんだ。共に歩む、俺のパートナー…。
だけど、まだ信じられない……この状況が…。これは現実なのか？…いや、現実なんだ。

俺は生きるって決めたんだ。俺はこんな所で、終わる訳には行かないんだ。最後まで、足掻いてみせる！
……だから信じる。
『私のたった１つの望み……可能性の獣』
そして俺の……神！

「頼む…。俺に力を貸してくれ。ユニコーンガンダム！」
［Ｒｏｇｅｒ．Ｂｏｏｔ　ｕｐ
ＵＮＩＣＯＲＮ　ＧＵＮＤＡＭ　ｓｅｔ　ｕｐ］

ブレスレットが光輝き、全身が光に包まれる。そして光が収まると、そこには全身純白のボディに一本角を生やしたロボットが居た。
その姿はまさに『白き一角獣』だった。

「これが、俺なのか？」

自分の体を見た俺は、驚きを隠せなかった。
何故なら、俺自身がユニコーンガンダムになっていたのだから。

「ッ！？　うわっ！」

ドガァン！

こちらに攻撃の意思があると判断したのか、ロボットがレーザーを撃って来た。俺はバックステップで躱した。取敢ず、自衛の為に武器の確認をする。

「ＡＩ……いやユニコーン、使える武装は？」

［頭部バルカン及び、ビームサーベルだけです。その他の武装は構築中］

「それだけあれば、何とかなる。行くぞ！」

俺は背部のスラスターを吹かして突撃する。

それに伴いガジェットとやらも応戦するが、俺にはまるでスローみたいにレーザーの軌道が見えた。

それに、次に何をすれば良いのか解る。

「ユニコーン、ミノフスキー粒子を戦闘濃度散布。レーダーを広域探知モードへ。少しでも戦闘区域に近付くものが居たら知らせろ」

［Ｒｏｇｅｒ］

「ッ！そこだぁ！」

ズバァッ！

懐に飛び込み、右腕のビームサーベルを装備して、１体のガジェットを一刀両断にした。

俺は、正直信じられなかった。何でこんな事ができる？戦闘訓練なんて受けた覚えは無い。なのにどうして……？

ガンダムになった体も、自分の思い通りに動く。

違和感も特に無い。生身で動く時と何ら変わり無かった。

ガジェット達は、仲間が墜とされても怯まず撃って来る。どうやら、こいつらはプログラムに従って動くだけのロボットの様だ。ユニコーンみたいに、こいつらからは感情と言う物を感じられない。
だけど、今は考える事より生きる事だ。
敵の数も約４０機、武器も2種類しかないなら、１機ずつ確実に墜とすしかない。

［マスター、１０時方向を！］
「！？　ミサイルか！」

大型がミサイルを放って来たが、ミノフスキー粒子のジャミングよって誘導できなくなり、有らぬ方向飛んで行った。
やはり散布しておいて正解だったみたいだ。

「ハァァァァ！！」

俺は2本目のサーベルを展開して、大型を×の字に切り裂いた。

「次っ！」

ダララララ！！

後から来た奴を、頭部バルカン砲で蜂の巣にした。凄まじい銃撃音が響き渡るが、どう言う訳か俺の耳は何とも無い。この鎧のお陰なのだろうか？
残りのガジェットも、同じ様に懐に飛び込んでサーベルで斬り墜とし、バルカンで蜂の巣にした。
だけど、次の標的に定めた大型にバルカンを撃った時は、何かバリアの様な物に阻まれた。
何だ？今のは？

［あれはＡＭＦと呼ばれる物で、一定以下の魔力を無効化するバリアの様な物です。この距離からのバルカンでは、あれを破るのは無理です］

ＡＭＦ？魔力？これ、実弾とビームじゃないのか？

……でも今は戦闘中、考えている余裕は今の俺には無い。この距離で破れないなら、接近するしかない。

俺は接近戦をしようと飛び込んだが、大型は突然体から金属の太い触手の様な物で応戦して来た。

俺が接近戦の武器しか持っていない事を学習したのか、俺を近付けまいと抵抗して来た。

だが、迫る触手はビームサーベルで斬り払う事で、どんどん短くなって行く。そして１ｍも無い距離に接近した時、ガジェットのカメラと思われる部分にバルカンを撃った。今度はバリアを突き破り、ダメージを与える事ができた。

どんなに強固な物でも、完全な鉄壁など存在しない。物には全て『限界』と言う物があり、それを超えてしまえば壊れてしまうのだ。それは、バリアとて同じである。

遠距離から撃った弾丸は、着弾地点が遠ければ遠い程、威力は下がる。弾丸自体に推進力は無く、発射時に得たエネルギーのみを力に飛んで行く。

力は距離に応じて低下して行く。低下した状態でバリアに当たれば、弾丸は弾かれてしまう。

ならば、力が強い内にバリアに当てれば、バリアへのダメージは大きくなり、軈て限界を超えて壊れると言う訳だ。

ダメージを受けて怯んだ隙を見逃さず、俺はサーベルを突き立て、抉る様に斬り裂いた。

「ふぅ……次だ」

それから龍聖は、次々とガジェットを仕止め、残りは5機以下となっていた。
すると、ユニコーンが警告を言って来た。

［マスター、この空域に接近するものがあります。数は1、このままでは、後8分で接触します］
「解った。後2機だ」

龍聖は残りの2機に突っ込み、その間をすり抜ける瞬間に体を大きく捻り、横回転切りで2機をほぼ同時に切り裂いた。

「このまま離脱する！」
［ミノフスキー粒子、ステルスモードで散布します］

龍聖はそのままの勢いで、戦闘区域から飛び去る。
例え機影が1だとしても、強力な援軍だった場合、消耗したこの戦力ではとても危険だと考えた龍聖は、全力で逃げる事を決めた。

正直言って戦闘になった場合、勝つ自信は無い。
ならば、少しでもリスクを減らす事を考える。況してや味方と判断するにも情報が少過ぎる上、敵ならば尚の事不味いのだ。

これは、転生前の人生で染み着いてしまった［警戒心］から導き出された答えであった。

「ユニコーン、色々聞きたい事がある。この世界の事、お前が言った魔力の事、全てを」

［はい。解りました］

この世界で生きる為には、まず情報が必要であると考えた龍聖は、安全な場所を求めるべく、戦闘区域から離れて行った。

龍聖が遠くへ撤退した後、戦闘区域に１人の女性が現れた。

「これは……」

女性は目の前の光景に驚愕した。そこには、４０機は居たであろうガジェットの残骸が、あちこちに転がっていたのだから……

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ１　白き一角獣　（改）（後書き）

如何でしたか？

感想等のコメントを書く時、１つ注意事項があります。
これは、活動報告にも書いた事ですが、『過度の批判や中傷』だけは止めて下さい。
ご理解とご協力をお願いします。

主人公設定（随時更新）（前書き）

主人公設定です。話の進み具合で更新する事になりますので、ネタバレがあると思います（汗）

主人公設定（随時更新）

≪名前≫
御劔　龍聖
ミツルギ　リュウセイ
年齢　２０歳　身長　１７６ｃｍ
イメージＣＶ：内山　昂輝

≪容姿≫
茶髪の癖毛で、藍色の目をしている。見た目はバナージ・リンクス。白いＴシャツに青いジャケットを羽織り、ジーンズにブーツを履いている。

≪性格≫
クールで近寄り難い雰囲気だが、本質は優しい。人間不信な所があり、相手の本質を知るまでは完全に信用したりはしない。
相棒のユニコーンに対しては、家族の様な愛情を持ち、大切にしている。

好きなもの
情報収集、アニメ（特にガンダム）、読書、空を眺める事、ユニコーン

嫌いなもの
腐った組織、汚い大人達、偽善者、無用な戦い

≪能力≫
ニュータイプ

魔力値
・ＳＳＳ

≪経歴≫
幼少時に中東で家族旅行中に紛争に巻き込まれ、戦災孤児となる。
その時、派遣された在日米軍の特殊部隊の指揮官に助けられ、日本に帰国した。

その後、世界の現実を知る為に独学で情報に関する勉強をした。その過程で大人達の汚さや、大組織の腐敗などを知った。
裏での違法取引や、困っている人を助けるフリをして金だけ騙し取ったり、他にも麻薬密輸の手引きや、暴力団の横暴、自分達の利益の為だけに他社を徹底的に叩き潰す大企業など。
更には家族の死後、財産目当てで接して来た親戚達と接した結果、大人や組織への不信感が募り、人間不信気味な捻くれた性格になる。
友人も数える程しかおらず人付合いが苦手だが、相手の本質を知る努力は怠らない。

昔から感が鋭く、先読みや他人の心を感じ取るなど、ニュータイプとしての能力も高い。実際、孤児になった後に接して来た親戚は皆が財産目当てであり、龍聖は彼らの同情の言葉の裏にそれがある事を見抜いた。
戦火に巻き込まれた経験から、人の死を感じ取ったり力の在り方を考える様になった。その為、無闇に力を振るう事を嫌っている。

組織嫌いから決まった職には就かず、バイトを転々として生活している。
その為、様々な免許証を所持している。
だが、これは表向きの理由であり、実際は様々な情報と技術を得る

為の手段でしかなかった。

≪現在≫

自分の世界にて、幼い子供を助けた事で代わりにトラックに跳ねられ、死亡する。

その功績により『ラプラスの箱』の管理者に選ばれ、新な『箱の担い手』としてデバイス『ユニコーンガンダム』と共に『リリカルなのは』の世界に転生する。

だが、彼の世界に『リリカルなのは』は存在しなかった為、知識は0である。

新な人生を得た事で、自分を変え様と思っているが、染み着いた情報収集の癖と他人や組織への強い警戒心は、早々抜けるものではなかった。

魔力や潜在能力は高いが、本人の技量はそこまで高くはない為、現在はユニコーンの性能と直感に頼った戦い方になっている。

真相意識の中には、嘗ての戦火に対する恐怖が未だに根付いており、時折悪夢に魘される事もある。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ２　戦いの跡（改）（前書き）

いよいよ原作メンバーの登場になります。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ２　戦いの跡（改）

龍聖がガジェットと戦闘に入る少し前、時空管理局機動六課では何やら少々張り詰めた雰囲気になっていた。

「小規模の次元振やて？」

「はい。本の僅かでしたが、次元振の反応が南西６０ｋｍの森で観測されました」

司令席に座る女性、八神はやては、隣にいる副官のグリフィス・ロウランから報告を受けていた。

「ＪＳ事件が終ってまだ４日しか経ってへんのに」

「はやて、私が調べに行くよ」

長い金髪の女性、フェイト・Ｔ・ハラオウンが言った。彼女は管理局の執務官であると同時に、はやての幼馴染みでもあるのだ。

「フェイトちゃん、ええんか？まだ体が万全やないやろ」

「なのはやヴィータ達の方が私より疲れてるんだよ。私なら大丈夫だから、任せて」

「じゃあ、お願いするわ」

「うん」

フェイトは現場へと向かった。

―フェイトＳｉｄｅ―

私は今、小規模次元震の調査の為に飛行している。場所は確か、南西６０ｋｍの森。現場まで後４０ｋｍ。
すると、機動六課のオペレーター、シャーリーこと、シャリオ・フィニーノから緊急連絡が入った。

≪フェイトさん、聞こえますか？≫
「シャーリー、どうしたの？」
≪現場付近にガジェットらしき反応多数確認。それから……これは、何！？≫

私は、シャーリーが突然驚いた様な声を出したから、何かあったのではと思った。

≪現場をサーチしていたら、レーダーが突然使えなくなりました！≫

シャーリーの言葉に、私は耳を疑った。
機動六課のレーダーが突然使えなくなるなど、今まで一度も無かったからだ。
え…？それって、どう言う事？何が起こったの？

≪解りません！レーダーもサーチャーにも、何も映りません！≫

ミノフスキー粒子によってレーダーは使えなくなり、サーチャーの通信電波や電子機器も障害を受けて使えなくなっていた。
この現実は、ミノフスキー粒子の特性を知らない彼女達には、驚愕以外の何者でもなかった。

≪考えても仕方あらへん。兎に角、現場に急行してや≫
「解った」
私はスピードを上げる。
そして現場に到達すると、そこにあったのは…
「これは……」
４０機は居たであろうガジェットの残骸が、至る所に転がっていた。
「これは、戦闘の跡……。ロングアーチ、こちらライトニング１」
ザザ…ザー……ザザザ
報告をする為に、機動六課へ通信を入れたけど、聞こえて来たのは雑音だけだった。
これが、例のジャミング？通信まで妨害するの？
［サー、周囲の電波状況がこれまでに無い程乱れています。ここは、一時離れた方が良いと思います］
「バルディッシュ　……解った」
電波障害がまだ直らないと判断した私は、一時この場から離れた。
一体、ここで何が起こったの……？

―廃墟地区―

その頃、龍聖は廃墟の街の中に身を止せていた。
龍聖は今、ユニコーンからこの世界について続きを聞いている。

「ここは『ミッドチルダ』と言い、幾つも存在する次元世界の１つです」

ユニコーンが言うには、ここは龍聖から見れば並行世界だそうだ。
その中でもここは、幾つもの次元世界を持ち、沢山の世界が同時に存在している世界だと言う。当然、そこには地球も含まれている。

だが、何故並行世界なのか？それは、この世界の地球は龍聖の居た地球と、似た様で違う歴史を歩んでいるからだそうだ。
ならば、この世界に転生した龍聖は『異物』、つまりはイレギュラーと言う事になり、地球に彼の書籍や家などある訳が無い。
要するに、龍聖に帰える場所など無いのだ。

「そうか……。じゃあ、デバイスについて詳しく教えてくれないか？」
「解りました。ですがその前に、マスターには魔力について説明する必要があります」
「そうだったな。頼む」

この世界には『魔法』と言う物があり、魔法を扱う者を『魔導師』と言う。
だが、誰にでも扱える物ではない。魔導師の体内には『リンカーコア』と言う物があり、それが魔力の源となっている。

魔力については個人差があり、強い者から弱い者までピンキリである。

更に、魔法にも使用者による特徴があり、各々が『術式』と言う物を持つ。

1つは、中距離、遠距離と相性が良いミッドチルダ式。これは一般的に最も多い術式であるが、近接戦闘を苦手とする面がある。

2つ目の古代ベルカ式は、近接・対人戦闘に特化した術式で、中でも優れた術者は『騎士』と呼ばれる。

3つ目は近代ベルカ式。これは、古代ベルカ式をエミュレートした物であり、基本的には古代とほぼ同じである。だがエミュレート物である為、ミッド式と相性も良く汎用性の高い術式でもある。

以上、この3つである。

「成る程。俺はどれに当てはまるんだ？」

［マスターはどれにも当てはまりません。あなたは完全なイレギュラータイプですので、術式は関係ないのです］

「そうなんだ。……なら、デバイスについて頼む」

［はい。デバイスとは―］

ユニコーンは、デバイスについての簡単なレクチャーを始めた。

デバイスとは魔導師の持つ杖であり、魔法を溜め込んだり、制御する為の演算をしたり、直接の武器になるなど様々な用途を持っている。

デバイスにはインテリジェント、アームド、ブースト、ストレージ、ユニゾンの5つの種類がある。

ストレージ型は、最も初期に造られたデバイスで、一般的にも最も多いタイプ。基本的には非人格型で会話機能は無いが、簡単な応答をするタイプもある。

ブースト型は、主に味方の魔法強化などの補助を専門としているタイプ。
アームド型は、主にデバイス自体を武器として使用するタイプで、ベルカ式の使用者（騎士）が主に使っている。
ユニゾン型は、別名『融合騎』と呼ばれ、その名の通り騎士と融合する事ができる。それにより、騎士と融合騎で別々の魔法を使用したり、同調させる事で魔法を強化したりもできる。　但し、使用するには適合率が必要であり、誰でも使える訳ではない。融合のベースは騎士の場合が多いが、稀に逆もある。融合時には、目や髪の色が変化する。
インテリジェント型は、ＡＩを搭載した意志を持つデバイスで、主の性質に合わせて自らを調節したり、状況に合わせて魔法を演算・発動したりもできる。
使用者は少くなく、デリケートな代物でもある。
ストレージ以外のデバイスもＡＩを持つが、インテリジェント並の意志や感情をを持つタイプは少ないと思われる。
因みに、ユニコーンはインテリジェントデバイスに分類されると言う。

「色々な種類があるんだな。ファンタジーに出て来るのとは、全然違う」
「これも、世界の違いによる物でしょう。では次に、バリアジャケットについてご説明します」
「バリア、ジャケット？」
ＢＪ（バリアジャケット）とは、デバイスによって構成される防護服の事。
一般的には共通の物が使用されるが、人によってはオリジナルを使う人も居る。ベルカ式の使用者（騎士）はＢＪではなく『騎士甲冑』と言う物を使用する。
但し、ユニコーンの様な全身装甲タイプは存在しなかった為に、ユ

ニコーンはロボットと思われても可笑しくない異質な存在なのだ。
「成る程…。一口に魔法と言っても、色々あるんだな。驚いたよ」
［ご理解頂けた様ですね、マスター］
「何とかな。ユニコーン、お前はラプラスの箱の在処は知ってるのか？」
［いいえ、私はただの鍵です。正確な所在地までは解りません］
「そうか。なら、原作の様に順を追ってくしかないのか。……武装の構築具合は？」

すると、目の前にモニターとデータが表示される。そこには、４種類の武装が映し出されていた。

［ビームマグナム、ハイパーバズーカ、シールド、ビームガトリングガンの構築が完了しました］
「マグナムやバズーカは解るけど、何でガトリングがあるんだ？これはユニコーン用の武器じゃないだろ？あるのは有難いけど…」

龍聖の言う様に、ビームガトリングガンだけは専用の武器ではない。
では、一体何故存在するのか？

［この装備も、私が造られた時に、製作者にインストールされていました］
「お前の製作者が？一体誰なんだ？」
［……申し訳ありません。製作者については強固なプロテクトが掛けられており、私自身にも開けない様にプログラムされています］
「そうなのか…」

専用武器だけでなく、ビームガトリングガンまでインストールし

てあると言う事は、ビームマグナムの威力に対する考慮か、手数の不足を補う為なのかもしれないが、それは定かではない。だが、存在するのは有難い事だった。

「ＮＴ－Ｄの方は？」
［使用できます。使用時間は、現在の所は５分が限界です］
「５分か……」

そこで龍聖は考え込む。ＮＴ－Ｄの使用方をどうすべきかと…。

「……ＮＴ－Ｄは暫く封印しよう」
［何故です？］
「この世界で、お前の様なデバイスが異質ならば、例えどんな相手であれ、余り手の内を見せるのは得策じゃないと思う」

相手に情報を与えないのも戦闘の基本だ、と言うのが龍聖の考えだった。

［情報戦と言う訳ですね。解りました。他に何かありますか？］
「いや、今は無いよ。今日は疲れた…」
［初めての戦闘でしたからね］

龍聖は床に寝そべり、天井の亀裂から空を見る。外は段々と暗くなっていた。
空には一番星が見えており、美しい星空になるのはもう時期だろう。
寝転がった龍聖は、今後について考え始める。

「（暫くはここに居るとして、生活費は日雇いバイト。後は……情報だな）なあ、ユニコーン」

［はい？］
「俺、本当に魔法が使えるのかな？それに、一度も戦った事すらないのに、何であんな事ができたんだろう？」

これは、龍聖にとって大きな疑問だった。魔法の事を知り、実際に使ったとは言え、本当にそんな力を持っているのか実感が湧かない。

戦闘に於いてもそうだ。龍聖は武道や護身術程度なら使えるが、本格的な戦闘訓練は受けた事がない。
龍聖自身が戦いを好まない性格もあるが、戦闘を熟せる程の実力を持っている訳ではないのだ。
では、何故戦えたのか？４０対１と言う絶望的な状況の中での勝利は何なのか？
ユニコーンの補助があったとしても、あの様な体の動かし方が今の自分にできるとは、到底思えない。

［マスターには確かに魔力があります。測定の結果、ＳＳＳランクである事が解りました］
「その、ＳＳＳランクは何なんだ？」
［魔導師はＦ～ＳＳＳ＋までランクがあり、Ｆが最も低くく、ＳＳＳ＋が最高ランクとなっています。マスターはＳＳＳなので、第２位の位置に居ます］
「え？……俺が？」

龍聖はとても信じられなかった。魔法に関しては初心者の自分が、ランク上では上位２位であるなど思ってもみなかったのだ。
今までそんな力を使った事すらないのだから、驚かない方が可笑しい。
ユニコーンの言葉からは嘘を感じ取れない。ならば、本当なのだと思う他なかった。

［マスターが戦える理由は解りませんが、貴方の中にある可能性の力がそうさせているのではありませんか？］
「俺の中の、可能性……？……まさか、俺が『ニュータイプ』だとでも？」

ユニコーンの言葉に、龍聖は意外そうな顔をする。
『ニュータイプ』…それは、ある人物が提唱した新人類。『宇宙に出た人類は、誤解無く解り合える存在になる』その存在がニュータイプである。
だが、龍聖にとっては架空の存在であるが、同時に憧れていた存在でもある。
その存在に自分がなったと言われても、実感が湧く事は無かった。

［ＮＴ－Ｄの発動条件は御存知なのでしょう？サイコフレームの反応も確認しています］
「やっぱり、このビスト財団の紋章に似た宝石は、サイコフレームだったのか」
［はい］

龍聖は、今は赤から透明になっているブレスレットの宝石を見ながら言った。ユニコーンの型をした紋章が、透明なクリスタルの様でダイヤモンドの様な輝きを放っていた。

「…俺はニュータイプなんかじゃないよ。……俺は、俺さ…。『元』死人だけど、これから宜しくな、ユニコーン」
［Ｒｏｇｅｒ．Ｍｙ Ｍａｓｔｅｒ］

まだ小さいが、そこには確かな絆が生まれていた。

―機動六課―

その頃、機動六課では先の戦闘に対する会議が開かれていた。

「小さな次元震だけかと思いきや、何だかマズイ事が起きたみてぇだな、八神」

「はい、これを見て下さい」

陸士１０８部隊所属のゲンヤ・ナカジマ三佐が睨みを効かせた表情で言った。

はやては、モニターにある映像を映す。

「これは……」

「ガジェット……」

フェイトの義兄であるクロノ・ハラオウンと、はやてとフェイトの幼馴染みの高町なのはは、驚きの表情になる。

映像に映っていたのは、龍聖によって破壊された約４０機のガジェットの残骸だった。

「フェイト隊長に次元震のポイントへ向かって貰ったんやけど、その途中でレーダーが突然使えなくなったり、サーチャーも映らなくなるっちゅう不可解な事が起きたんや」

「そして現場に着いたら、既にこうなっていたの」
2人の話に、誰もが表情を険しくする。［これはただ事では無い］と誰もが思った。
「その話からすると、現場に居た何者かが強力なジャミングを使い、ガジェットを全て破壊したと言う事になる」
「じゃあ、そいつが次元震を引き起こしたのか？」
はやての家族であり、部下でもあるヴォルケンリッターのシグナムとヴィータは、互いの推測を言った。
「その可能性はあるけど、まだ解らへんのや」
「現場検証して調べた結果、ガジェットを破壊したのは2人以上の可能性が出てきたの」
「どう言う事？」
「これを見て」
モニターに別々の残骸が映し出された。
モニターの右に映ったのは、ビームサーベルで切り裂かれた残骸。
そして、左がバルカン砲で蜂の巣になった残骸だった。
「破壊のされ方から、接近戦型と射撃戦型の魔導師が居る事になる。しかも接近戦型は、炎系統の魔導師の可能性が高いと思う」
「何でそう思うんだ？」
「ここを見て」
フェイトは、ビームサーベルで破壊された残骸の切り口を拡大する。

「これって……鉄が溶けた跡、だよね？」
「確かに、こりゃあ何かで焼き切られたって感じだなぁ」
なのはとゲンヤが言う様に、ビームサーベルによって溶断された切り口は、高熱で溶けていた。
この映像から、ガジェットを破壊した者は最低でもAランク以上である事は、誰の目にも明らかだった。
映像を見たシグナムの目も、確信に満ちていた。
「これは確かに、私と同じ炎系統と言う事になるな」
「成る程。状況は大体見えたが、ジャミングの原因は解ったのか？」
「それが……全く……」
クロノの問いに、シャーリーは申し訳なさそうに言う。分析を得意とする筈の自分が、何の役にも立てなかった事が悔しいのだ。
「シャーリーの所為じゃないよ」
「はい……」
なのはが気遣いの言葉を言うが、直ぐに納得できるものではなかった。
「残留魔力も、ジャミングの所為で全く解らなかった」
「これだけ出来るっちゅう事は、少なくとも隊長陣並の実力者って事になるわな」
誰もが色々な考えを廻らせるが、情報が圧倒的に少ないこの現状では、幾ら考えた所で憶測の域を出る事はない。
だが、それでも人は考える。これは、真実へ近付きたいと言う本能なのかもしれない。

部屋の空気が少しずつ重くなる中、クロノが締め括る様に言った。
「この件は、暫く保留としよう。手掛かりが少ない以上、これ以上は不可能だと思う。
だが、警戒を怠らないでくれ。今回のＪＳ事件を切っ掛けに、どんな犯罪者が動くとも限らないからな」
『了解』

だが、この戦いを機に新な戦いが起こるとは、今の彼女達には想像もつかなかった。

―？？？―

管理局とはまた別な場所で、小さな会議らしき物が開かれていた。
「ミノフスキー粒子を感知しただと？」
「はい。ミッドチルダから南西６０ｋｍの地点に、戦闘濃度のミノフスキー粒子を感知しました」

執務室らしき部屋の窓辺に立つ上官と思われる男は、部下の報告に興味深そうな反応をした。
「更に数分前に、小規模の次元震が確認されており、ロストロギアか、何者かが転移してきた可能性があります」

「それは興味深いな…」
「スパイの情報によると粒子を散布した者はガジェットの生き残りと戦闘になり、使用した武装はビームサーベルとバルカンらしいとの事です」
「ほぅ…」

窓辺に立っていた男は自分のデスクに座ると、顔の前で手を組む。その表情からは何も読み取る事はできないが、「久々に面白い物を見つけた」と言った感じの空気が取り巻いていた。

「サーベルやバルカンとなると、我々と同じデバイスを使用した可能性が高いな」
「はい。武装の種類から判断しますと、使用したデバイスはジムタイプ、もしくは…」
「…ガンダム…」

『ガンダム』と呟いた男は怪しげな笑みを浮かべる。そして、男の着けている仮面の目が怪しく光るのだった。

デバイス設定（随時更新）（前書き）

主人公のデバイス設定です。主人公設定と同様に、話の進み具合で更新していきます。

デバイス設定（随時更新）

≪デバイス名≫
ユニコーンガンダム

≪デバイスタイプ≫
インテリジェント型
モビルスーツデバイス

≪待機状態≫
白銀のブレスレット

≪詳細≫
リストバンドぐらいのブレスレットで、中央にビスト財団の紋章と同じユニコーンの形をした宝石がある。その宝石はサイコフレームで出来ており、普段は透明でセットアップ時や、何かに反応した時に赤くなる。

性能は折紙付きと言える程高く、演算からハッキングまで他のデバイスを凌駕している。

裏側には文字が彫られており、旧フランス語で
『ＡＭＯＮ　ＳＥＵＬ　ＤＥＳＩＲ（私のたった１つの望み）』
と書かれてる。

［ラプラスの箱］の管理者を名乗る者から龍聖に託されたデバイスであり、［ラプラスの箱］の鍵でもある重要な存在。
龍聖を見つけるまでは、主と呼べる者はおらず、封印され続けていた。

製作者については不明。

≪戦闘体形≫
ユニコーンモード
通常時の戦闘フォーム。全身が純白の装甲に覆われ、ユニコーンガンダムその物の姿になる。
陸、海、空、宇宙に至る全ての環境で戦闘でき、汎用性は高い。

デストロイモード
ＮＴ－Ｄ、『ニュータイプ・デストロイヤー』が発動し、リミッターが解除されたモード。
全身の装甲がスライド展開し、頭部が変型する事によりガンダムの姿に『変身』する。全戦闘能力、特に機動力が桁違いに跳ね上がり、そのスピードはニュータイプであろうと目で捕える事も、気配を察知する事もできない。
現在の使用限界時間は５分間。

≪武装≫
ビームマグナム
ユニコーンの主兵装で、従来のビームライフルの４倍以上の威力を誇る。
破壊力と貫通力に特化された武装であり、特殊な防御を使わない限り確実に貫通される上、掠めただけでも命取りになる。
エネルギーパックは５つ装填され、カートリッジシステムとして使用される。予備パックはリアスカートアーマーに装備される。
但し、使用できるカートリッジは一回の戦闘で１５個まで。それ以上は体にどの様な負荷が掛かるか解らない為、禁止されている。

威力は良いが、強力過ぎる故に使い勝手が悪いと言う欠点がある。

ビームサーベル
バックパックに2本、両腕に1本ずつ装備されていて、必要に応じて展開される。
腕のサーベルは手に持たなくても展開可能で、ビームトンファーとして使用できる。

頭部バルカン砲
頭部に二門装備されている機関砲。5発に1発の割合で曳光弾が仕込まれており、発射中に射線修正ができる。主に、牽制や魔力弾の迎撃に使用される。
威力はマシンガン並にあり、当り所によっては致命傷になりかねない。

ビームガトリングガン
高い威力を持つ4連装ガトリングガンで、主兵装にも牽制にも使用できる。一挺、又は二挺を連結させて手に持つか、シールドの裏に装備する事ができる。
元々ユニコーン用の武装ではないが、アナハイム製なので扱いは問題ない。
街中など、ビームマグナムが使い辛い場所では主兵装として使用される。

ハイパーバズーカ
通常弾頭とベアリング弾を仕込んだ拡散弾頭、近接信管のVT弾頭

をカートリッジ別に使い別ける事ができる。
予備カートリッジは、リアスカートアーマーに装備する事ができる。
ビームガトリングガンと同様に、マグナムが使い辛い場所では主兵装となる。

シールド
ユニコーンガンダム専用のシールド。中央にＩフィールド発生装置があり、砲撃系の攻撃に対して高い防御力を持つ。
シールド自体も堅牢に作られており、そう易々と壊れる事はない。

≪システム≫
・ＮＴ－Ｄ
正式名称はニュータイプ・デストロヤー。その名の通り、ニュータイプを殺す為のシステム。
ユニコーンガンダムのリミッターを解除し、戦闘能力を桁違いに跳ね上げ、真の姿である『ガンダム』の姿に『変身』する。
敵がニュータイプであった場合、それを感知する事で発動する。もしくは自分を感知させる事で、ある程度の任意発動ができるが、発動条件には不明瞭な点が多く、謎の部分が多い。

・シンクロアーマー
セットアップした時に体は機械になり、肉体はコアである魔導核融合炉と一体化する。
それにより、機体がダメージを受けても肉体は大丈夫だが、痛みはフィードバックする。
但し、シンクロ率が高いと受ける痛みは増し、肉体にもダメージがいく場合がある。

これは、製作者がパイロット（使用者）の保護を優先して備え付けたシステムと思われる。

・ミノフスジャミング
ユニコーンのみに備えられたシステム。
ミノフスキー粒子によるレーダー等の電子機器を妨害するだけでなく、噴射量や濃度の調節によってステルス機能を得る。
これは、ユニコーンが単独行動を主眼に設計されている為と思われる。

・???
現在は封印されている。

・???
現在は封印されている。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ３　始まりの風　（改）（前書き）

遅くなってすみません。
今回は、ガンダムＵＣ側よりある人物が登場します。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ３　始まりの風　（改）

ミッドチルダに現れてから翌日、龍聖はユニコーンから武装についてのレクチャーを受けた。
武装の知識は持ち合わせていた為、使い方は解っていたが、やはり本物と違う所があった。

１つは、撃ち出される弾丸やビームは、本物と同じ出力・威力を持っているが、構成の源は自分の魔力であり、弾は魔力が枯渇するまで無限に撃つ事ができる。
２つ目は、ビームマグナムのＥパックは『カートリッジシステム』と呼ばれる物で、１つ消費する事で一時的に爆発的なパワーを得る強化システムだと言う。
本来、カートリッジシステムはデリケートなインテリジェントデバイスに組込む物ではないが、製作者がマグナムの構造を利用して組込んだとの事だ。
但し、カートリッジは一回の戦闘で１５個までしか使用してはならない。理由は、体への負荷を考慮すると１５個が限界なのだと言う。

［―以上です。何かご質問はありますか？］
「いや、無いよ。……ユニコーン、主兵装はガトリングガンか、バズーカにしよう。ビームマグナムは強力過ぎるし、多分消費も激しい……取り回しはガトリングガンや、バズーカの方が良いと思う」
［解りました］

龍聖の判断は、戦術的に見て正しいと思われる。消費を少しでも抑えるのは、戦闘以外でも基本と呼べる事。だが、使用を控える理

由はもう1つあった。龍聖にとっては、こちらが本命と言える理由が。

龍聖は恐れていたのだ。自分が誰かを殺してしまうのではないかと言う恐怖が、彼の中にあった。

『非殺傷設定』……ユニコーンから説明を受けたデバイスのシステムの1つ。魔法攻撃を当てた相手を殺さない様にするシステム。これは、世界中の警察が喉から手が出る程欲しい物だろう。致命傷を与える攻撃でも、相手が死ぬ事が無いのだから。

ビームマグナムの威力は充分解っている。非殺傷でも『万が一』と言う場合がある。魔力もBJも無い普通の人に、あの破壊力のあるマグナムのビームが当たった場合、その痛みは計り知れないだろう。外した流れ弾が、人や建物に当たらないとも限らない。

人間には非殺傷設定が働くかもしれないが、恐らく建物には通用しない。流れ弾で破壊した建物の破片や、倒壊によって人が死ぬかもしれない。
これは間接的とは言え、自分が殺した事になる。龍聖は、人殺しをしたくはないのだ。

「……っ」

龍聖は自分の両手を握り、心に問い掛ける。
『ガジェットの様なロボットが相手ならまだしも、人間が相手になった時、自分は引き金を引けるのか？』と……。

龍聖がミッドチルダに現れてから、3週間目が経過した。
龍聖は、廃墟の街でまだ使える建物を見つけ、そこを隠れ家にしていた。電気や水道は奇跡的に生きており使っているのだが、ガスは漏れによる爆発の危険性を考慮して使っていない。その為、燃える物を使って火を起こしている。
更にはジャンクの中から使える物のかき集め、修理したり改造する事で転生前より劣るが、それなりの生活をしていた。

実は修理や改造の際に、ビームサーベルが非常に役に立っていたのだ。
サーベルは出力を調節する事で、溶断・溶接が簡単にできる。

例えば、火を使う場として使っているバーベキューコンロは所々色が違い、繋ぎ合わせた跡がある。このコンロは、平たい鉄板を集めて溶接した物なのだ。
更に、ビームサーベルは水に刃を当てれば瞬間湯沸し器代わりにもなり、風呂の心配も無いのだ。

「ふぅ……今日も良く働いたな」
［お疲れ様です。マスター］

日雇いバイトから戻った龍聖は、ベッドに寝そべる。彼の生活費は、日雇いバイトによって賄われている。私物は死んだ時のままであり、金はあったが流石に日本円は使える訳がない為、日雇いバイトを始めたが、決まったバイトに就かないのは、やはり以前からの癖であった。

因みに、言葉についてはミッド語を知らない筈なのに、何故か読み書きや会話ができる為、特に問題は無かった。

「俺がここに来て、もう3週間かぁ……早いな」

［時間とはそう言う物です。今日はハッキングしますか？それとも、シミュレーションモードを使いますか？］

「ハッキングするよ」

龍聖が起き上がると、目の前にモニターとキーボードが現れた。

「時空管理局の状態を調べるか」

［Ｒｏｇｅｒ］

龍聖は3週間の内に、この世界の情勢を調べていた。この世界には『時空管理局』と言う大組織があり、数々の次元世界を管理していると言う。

主な活動内容は、ネット等で調べており、警察や軍隊の様な物だと言う事が解っている。更に、この様に巨大な組織は時空管理局と、協力関係にある『聖王教会』だけだと言う。

力は管理局の方が大きい様だが、龍聖は接触しようとは思えなかった。

世界を管理し、世界唯一の軍とも言える管理局の現体制は、龍聖には地球連邦の様に思えるのだ。しかも世界の枠を超えた。

更に調べて行く内に、警察組織にあるまじき不正行為が多数発見できたのだ。だが、その事実は世界に公表されてはいない。

その結果、道行く人に聞いて返えって来た答えは『管理局は正義の味方』『悪さをするなど有り得ない』など、一般人は完全に管理局を信じきっていた。

「『正義』か……良い言葉だな…」

龍聖は険しい表情になる。以前に極秘資料の1つにアクセスした時、彼が見た物は『人体実験』の記録と資料だった。内容は『リンカーコアの強化』だった。その実験で幾人もの人工生命が誕生したが、9割が魔力を持たないと言う理由だけで処分された。魔力を持って誕生した者も、無茶な実験で俳人状態になってしまい、処分された。
処分の方法も、焼却などの無慈悲な物だった。

「情報操作と『正義』を盾にするか……。正義の味方が聞いて呆れる」
［酷いですね……］
「全くだ。恐らく一般局員は、裏でこんな事が行われている事など知らないだろうな。知りながら放置しているとしたら、極悪所の話じゃない」

この現状は、龍聖に警戒心を懐かせるには充分であった。そして、深入りが危険な事を承知の上で、龍聖は管理局の全てを知る決意を固めたのだった。
まだ結論を出すのは早いが、今は自分と相棒を信じて進むしかない。そして、自分の為すべき事を為す。その為に、龍聖は更なるハッキングを始めるのだった。

「……ん？何だ？」

ハッキングして行く内に、ある情報が龍聖の目に飛び込んできた。それは、龍聖が現れて2週間程から、管理局の部隊が謎の勢力に襲撃される様になったとの事だ。

「一般人には公になっていない情報か……」

［どうやら、機密ランクの高い情報の様です。どうしますか？］
「勿論調べる。これは絶対に何かある。俺には、そう思えるんだ」
［解りました］

龍聖は、この情報に引っ掛かる物を感じていた。何故だかは解らないが、理屈で説明できない『何か』が、彼を突き動かしていた。

ー機動六課ー

一方、機動六課でも襲撃事件の話題で持ちきりとなっていた。

「また襲撃を受けたんやて？」
≪ああ。また例の襲撃者だろう。今回も……全滅だったらしい≫

通信越しに、クロノの悔しそうな声が聞こえる。
襲撃事件の犯人は殺傷設定の魔法を使っているらしく、襲われた者は全て殺されているのだ。
しかもレーダー類は死に、通信妨害を受け、残留魔力も大して検知できず、相手の情報も入らない為に捜査は難航していた
この事件は、なのは達も痛恨の思いだった。

「これで12件目だよね。何でこんな事するんだろう……」

「クロノ、何か犯人の手掛かりは無かったの？」
≪今回は、僅かだが手掛かりになりそうな情報が入ったよ≫

その言葉に、なのは達は期待の目を向ける。今まで謎に包まれていた犯人の手掛かりを掴んだとなれば、どんな人間でも期待するものだ。

「その手掛かりって何んなんや？」
≪辛うじて生きていた局員が居たんだが、既に死かけで僅かしか聞けなかったが、化物、とか……ゴーレム、とか後は……箱、とか言っていたとかだな≫

その話に彼女達は？マークを浮かべる。キーワードの様な言葉を並べられて解る人間など、そうは居ないだろう。

「化物？ゴーレム？」
「箱？何の事だろう？」
「他に何か言うて無かったん？」
≪残念だが、そこで息を引き取ったらしく、それ以上は……。だが、犯人と思われる者の映像は手に入ったんだ≫

その言葉に、一斉に反応を示した。

「ホンマか！？それを早く言うてや！」
「そうだよクロノ君」
「どんな映像なの？」
≪そうだな……これを見てくれ≫

モニターに、犯人と思われる者の映像が映し出されたのだが……

「何？これ？」
「何だか良う解らんなあ」「でも、人影みたいなのが映ってる」
映像は余りにも酷く、何が映っているのか良く解らないが、フェイトの言う様に2つの影らしき物は見える。
1つは角ばったスリム系の体格で肩には2本の突起物、それに盾の様な物と銃らしき物を持っている。
もう1つは丸っこいが、ガッシリした体格で肩に刺の様な物があり、目と思われる物が怪しく光っている。
≪半壊したデバイスからは、これしか手に入らなかったんだが、この映像からして犯人は2人以上、それに人間ではない様にも見える≫
「確かに言われてみれば、そんな気もするね」
「でも、これだけじゃ解らないよ」
「そうやなぁ……」
なのは達には、乱れたシルエットで相手を判別する術は無かった。だが、例え乱れてなかったとしても、正体を知る事は現状では不可能だっただろう。
≪そうだな。だが僕は、3週間前の事件と今回の襲撃者達は、何か関係があると睨んでいるんだ≫
「やっぱりクロノ君もそう思っとったんやね」
≪状況が似過ぎているからな。もしかしたら同一人物の仕業かもしれないしな≫
クロノの推理は、ある意味で当たっていた。
≪だが、まだ証拠を得た訳じゃないし、正体も目的もハッキリしない以上、警戒を怠らないでくれ。いつ襲撃されるとも限らないから

な≫
『了解』
謎は深まるばかりだった。

―？？？―

どこかの会議室と思われる場所には仮面を着けた男と、傍に副官らしき青年が居た。すると扉が開き、１人の男性が入って来て敬礼する。

「大佐、ウェイン・オーティス少佐、只今帰還致しました」
「ご苦労だった、ウェイン少佐。どうだったかね？」

大佐と呼ばれた仮面の男は、ウェインに労いの言葉を言い、彼から報告を聞く。

「はっ。今回も、『箱』に関する情報は得られませんでした」
「そうか……。これで１２回も管理局と戦闘になった以上、上層部に我々が何を探しているのか解ってしまうかもしれん」
「その件に関しては、申し訳ありませんでした」

ウェインは頭を下げるが、男はそれを止める。どうやら彼を責める気は一切無い様だ。

「気に病む必要は無い、ウェイン。管理局と鉢合わせになったのは、不運としか言い様が無い」
「ありがとうございます」
「例の人物については何か解ったのか？」
「いえ、あれ以来姿を現さず、消息も掴めておりません」

男の言う『例の人物』とは、龍聖の事である。顔も名前も知らないが、自分達と同じデバイスを持つ者がどこかに居るのは確かである為、探しているのだ。

「そうか……。余程用心深い人物と見えるな。解った、もう下がって構わんよ」
「はっ、失礼します」

ウェインは敬礼して部屋を出た。男は少し考えると、自分の隣に立つ青年に告げた。

「うむ……。やはり、捜索の優先順位を変えた方が良いかもしれん」
「宜しいのですか？フロンタル大佐」
「箱の所在が解らない以上、手の打ち様が無い。それよりも、もし探している人物のデバイスがガンダムだとしたら、尚更管理局に渡す訳にはいかんのだよ。レウス」
「はい。大佐」

レウスと呼ばれた青年は、仮面の男、フル・フロンタルに同意した。すると、フロンタルの口元が笑い、レウスに話し掛ける。

「レウス、次は君が出てくれないか？君なら見つけられるかもしれない」
「了解しました」

レウスは敬礼をすると、部屋を出た。

―格納庫―

レウスは格納庫へとやって来た。そこはとても広く、戦車が横に5台並んでもまだ余る広さだった。そして、彼は右手に填めた指輪に話し掛ける。

「行くぞ、クシャトリヤ」

『OK．Ｇｅｔ　ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ』

レウスの体が光に包まれる。光が収まると、そこには2mはある身長にゴツい体格、それに大きな4つの羽根に1つ目の大型ロボットが居た。

その姿は正しくネオ・ジオン軍の大型モビルスーツ、クシャトリヤだった。

ガシャンッ

レウスはカタパルトに足を乗せ、中腰になって構える。

「では大佐、出撃します」

≪頼む≫

「レウス・ローレライ、クシャトリヤ、出る」

その言葉を合図に、体にGが掛かる。カタパルトが動き出したの

だ。そのGに身を委ねるとカタパルトから射出され、レウスは次元空間と言う名の空へ飛び立った。

ー時空管理局ー

管理局の暗い一室、その中で会議らしき物が行われていた。だが、只の会議と言える雰囲気ではない。何より、人の気配が感じられないのだ。

「あの男の配下が動いている様だな」
「うむ。今回は第２３管理世界に現れたとの報告が来ている」

暗い部屋に木霊する声。だが、人の姿が無い。あるのは、何かの液体に満たされた透明な筒が３本あるだけだった。
だが、その筒の中に何かが入っている。そして、部屋に木霊する声は、その筒に着いているスピーカーから発っせられていた。
筒の中に入っていたのは、人間の脳髄だった。その光景は、かなり気持ちの悪いものだった。この会議は、その脳髄達による物だった。そして、この脳髄達こそが、時空管理局のトップに君臨する『最高評議会』のメンバーなのだ。

「第２３管理世界か……。やはり、奴の狙いは『アレ』であろう」
「恐らく間違い無いだろう。奴の配下が現れたのは、全て『あの男』が関わっていた世界だ」

「だが、今になって『アレ』を探し出そうとするとは想像もしておらんかった」

何やら、彼らにとって不味い事が起こっている様だった。

「『アレ』が世に放たれれば、今の世界は滅びてしまう」
「左様。『アレ』を奴の手に渡してはならない」
「奴の手に渡る前に、何としても『アレ』を手に入れるのだ」
『全ては次元世界の平和の為に』

その言葉を最後に、会議は閉会した。彼らの言う『アレ』とは、一体何なのであろうか？

―廃墟地区―

一方、管理局の情報を見た龍聖は、驚愕の表情になっていた。それは、先程なのは達が見ていた映像だった。

「……ユニコーン」
［シルエット照合が合致しました。この2つは間違いなく……］
「ジェガン……それに、ギラ・ドーガ……何で？」

龍聖にとって、シルエットの存在は見知った物だった。モビルスーツ（ＭＳ）、自分と同じイレギュラーの存在、『まさか自分以外にも、この世界に現れた者が居るのでは』と言う考えが頭に浮かぶ。しかも、既に管理局と事を交えていた。ここに映る者が自分にとって敵なのか、味方なのかは解らない。だが、存在する事は確かであった。

［どうしますか？マスター］

「……暫くは様子見だ。まだ答えを出すのは早過ぎる……」

龍聖はモニターを切ると立ち上がり、部屋の窓辺に歩み寄る。

「……嫌な風だな」

龍聖の呟きは、吹き抜ける風の中へと消えた。

それぞれの出会いは近い。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ３　始まりの風　（改）（後書き）

フル・フロンタルは、今後の重要人物として描くつもりです。

彼が何故いるのかは、今後のエピソードで明かしていきます。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ４　預言と邂逅　（改）（前書き）

何とかＥｐｉｓｏｒｄｅ４ができました。
出来栄えは……自身ありません（汗）←オイ

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ４　預言と邂逅　（改）

レウスが龍聖の探索を始めてから、２日が経過した。龍聖は未だに見つかっていない。その頃、管理局では機動六課を含めたメンバーが集められ、会議が行われていた。

≪今日集まって貰ったのは、例の襲撃者達についてだ。上層部が情報を掴んだらしい≫

「襲撃者って、ここ最近になって現れてる謎の武装集団の事ですよね？」

「何か新しい情報が入ったんですか？」

ＦＷ（フォアード）メンバーのスバル・ナカジマと、ティアナ・ランスターがクロノに尋ねる。今回の事件は、彼女達も悲痛な思いをしていた。

≪連中の正体は未だに不明だが、上層部からの情報によると、連中はある物を狙っているとの事だ≫

「ある物？」

「それって何んなんや？」

≪［ラプラスの箱］と言う物らしい≫

聞き慣れない単語に、誰もが疑問の表情を浮かべる。ＦＷメンバーで最年少のエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエは、フェイトに問い掛ける。

「ラプラスの、箱？」

「フェイトさん、知ってますか？」

「私も、聞いた事ない。クロノ、それは何なの？」

≪僕も詳しい事は解らないが、もし箱が開かれれば、この世界が全て滅ぶと言われているＥＸ（最高）ランクのロストロギアだと言っていた≫

その言葉に誰もが驚愕の表情になる。ＥＸ……つまりはＳランクを上回る存在を示している言葉だ。

シグナムとヴィータも驚愕の表情であった。嘗てのベルカ戦争から現在に至るまで、ＥＸランクのロストロギアなど聞いた事が無かったからだ。

「ＥＸランク……だと？」

「そんなに、物騒な箱なのかよ……」

彼女達だけでなく、なのは達隊長陣も同様に、驚愕していた。

「そんな箱があったなんて……」

「クロノ君、その［ラプラスの箱］っちゅうんは、どこにあるんや？」

≪上層部の話では、その箱は１００年以上前に喪われた物らしく、箱の正体や中身、在処を知る者は誰も居ないらしい≫

≪無限書庫にも、［ラプラスの箱］に関するデータは何１つ出て来なかったよ≫

別のモニターでは、時空管理局無限書庫の司書長、ユーノ・スクライアは検索結果に対して不思議そうに言った。

『無限書庫』は、世界中のありとあらゆるデータが保存されている場所。世界最大のデータバンクと言われる程である。その名の通り、無限に等しい本が存在するのだが、その膨大な量と未整理さから、検索は困難な状態になっている。

ユーノが司書長になった事により、大部マシにはなってはいる。
勿論歴史のデータも豊富である為、検索に引っ掛かる筈なのだが、何1つ出て来なかったのは今回が初めてと言えるのだ。
「ユーノ君の方でも、手掛かりはゼロだったの？」
≪うん。EXランクと言われる程の物なら、何かしらのデータが残っていても可笑しくないのに、それが無いって事は……データに残しちゃマズイ程の物なのかもしれない≫
無限書庫のデータに残せない程の代物、［ラプラスの箱］とは一体どれ程の物なのか？
≪てこたぁ、それだけヤベェもんが狙われてるって事か≫
「箱が開かれれば世界が滅ぶ……まるで［パンドラの箱］やなぁ」
「でもそれが事実なら、テロリストの手に渡す訳には行かない」
誰もが自分達の役目を認識して頷く。今までに無い戦いが起こると誰もが予想しているのだ。
≪その通りだ。僕達の任務は、テロリストよりも先に［ラプラスの箱］を発見し、回収する事だ。各員の奮闘を期待する≫
『了解！』
≪では解散とするが、隊長陣は残ってくれ≫
クロノの言葉に、なのはとフェイト、そしてはやてを残し、他のメンバーは退室した。
≪残って貰ったのは他でも無い。騎士カリムから重大な話があるんだ。聞いてくれ≫

モニターに聖王教会所属の騎士、カリム・グラシアが映る。
≪皆さん、お久し振りです。実は昨日、私のレアスキルが新な預言を刻みました≫
「新な預言って、カリム、まだ1年経ってへんやろ」
≪ええ。でも昨日、突然発動して預言が刻まれたのは確かです≫

カリムのレアスキル『預言者の著書』は未来を詩文の形で預言する物で、特定の条件下で無ければ発動不可と言う特性から、年に1回しか発動できない。

文字は古代ベルカ語。しかも、解読によっては意味が全く異なる物になる為、かなり扱い難い代物なのだ。

「騎士カリム、預言には何と書かれているのですか？」

フェイトの問いに、カリムは展開した紙の中から1枚を取出し、読み上げる。

≪喪われし禁断の箱が目覚める時、異界より選ばれし箱の守護者は一角の獣を従え、かの地に舞い降りる。
それを機に、幾多の者は箱を求める。
赤い彗星の再来は、世界を粛清せんが為に。法は全てを闇に葬らんが為に。

新なる戦乱の中、反攻の大鷲は天を舞い、憎しみ深き深緑の羽根は牙を向く。
影に潜みし者達は、若き命を守らんが為にその身を日の下に晒す。
獣と雷光は刃を交え、羽根と星光は滅びの光を放ち、鷲と夜天は戦

の序曲を奏でる。
獣と彗星の激突を先駆けに、戦火の狼煙が揚がる。
法の味方に在らざる守護者は己が道を行き、心を閉ざし者達を救う。
無限の欲望は希望を、彗星の再来は己を、黒き獣は光を得る。
然れど、獣達が刃を交えし時、羽根は焼け落ち、鷲は翼を失う。
箱が闇に包まれる時、革新者と可能性の獣は目覚め、闇を切り裂く剣とならん。闇が砕かれし時、世界は心の光に導かれ、新なる光に包まれん≫

預言の内容を聞いたはやて達は考え込む。今回の内容は以前とは違い、彼女達には解らない単語が多かったのだ。

「う～ん。今の話やと、禁断の箱っちゅうんはラプラスの箱で間違いあらへんなあ」
「うん。しかも、箱には一角の獣を従えた守護者が居る」
「でも、解らない所も結構あるよね」

なのはが言う様に、預言の内容で解らない所の例を挙げると、赤い彗星の再来、反攻の大鷲、深緑の羽根、黒き獣、心の光などである。
だが、もう1つ別の意味で解らない所があった。それは［法］である。この単語には、思い当たる節があった。

≪法は恐らく管理局の事だろうが、全てを闇に葬るとはどういう事だ？≫
≪それに、守護者は法の味方に在らずって事は、管理局の敵って事なのかな？≫
≪それは解らねぇが、味方じゃねぇって事は確かなんじゃねぇか≫

≪しかし、守護者は心を閉ざし者を救うともあります≫

各々の憶測が飛び交う。確かに、預言の内容にはその様な事が書かれていた。［箱］の守護者は無限の欲望、彗星の再来、黒き獣の心を救うと。だが同時に、［法の味方に在らず］とも書かれていた。

≪それもそうだが、最後の革新者と可能性の獣とは何の事だ？≫

「確かに、そこも大きな謎やなあ」

「そうだね」

いくら考えても、これ以上は解りそうもなかった。　この預言は、ある程度の未来を知る事はできるが、内容の単語が何の事を指しているのかまでは解らないのだ。更に、的中率は『前回の事件』で実証済みだった。だが、現在の情報量では謎の文としか言い様がなかった。

≪でも僕らのやる事は決まった。まずはこの、［箱］の守護者を探す事だ。きっと［ラプラスの箱］について何か知っているはずだ≫

「そうだね。もし協力して貰えたら、［箱］の手掛かりが掴めるかもしれない」

「決まりやな」

「難しいかもしれないけど、お話しすればきっと解って貰えるよね」

クロノが締め括る事で話は纏まった。だが、彼女達は知らなかった。

龍聖が強い警戒心と、どれだけ強硬な意志を持っているかと言う事を。

ー田舎街郊外ー

その頃、龍聖は田舎街での日雇いバイトを終え、隠れ家へと向かっていた。

「ユニコーン、今日は帰ったらシミュレーションをーピキィンッーうっ！」

突如何かが頭の中を過り、龍聖は頭を抱えた。頭痛にも似た感覚が、彼に襲い掛かる。

［マスター、どうしました！？］

「何だ…？今の感覚は……？何かが…来る？」

何かを感じ取った龍聖は、今までに感じた事の無い感覚に戸惑いを覚える。本能も危険だけではなく、別の何かを訴えている。だが、初めての感覚故に、それが何なのかは解らなかった。

［！？　マスター、こちらに接近するものがあります！数は1、さらにミノフスキー粒子をを検知しました！後３０秒で……ッ！マスター！］

「来る……ッ！！」

上を向くと、そこには自分を覆い隠す程の緑色の巨体に４枚の羽根に袖の様な腕を持ち、そして１つ目の頭部を持ったロボットが空に浮かび、こちらを見下ろしていた。

「……クシャトリヤ」
「（この感覚……もしや、この男が…）」
遂に出会った龍聖とレウス。この出会いは、一体何を齎すのか……

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ４　預言と邂逅　（改）（後書き）

すみません（汗）　次回は必ず戦闘しますので、宜しくお願いします！

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ５　獣と巨兵と　（改）（前書き）

龍聖ＶＳレウスに突入しました。
上手くできているか自信がありませんが、宜しくお願いします。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ５　獣と巨兵と　（改）

「……クシャトリヤ」

自分を見下ろす巨大な存在。龍聖は見知ったＭＳを前に、思わず声を漏らす。

「（何んだ……？この感覚は……？）」

「（この感覚……もしや、この男が……）」

互いに何かを感じ取り、戸惑いを見せる。だが、レウスは感覚に戸惑いつつ、龍聖をスキャンした。

「魔力数値……ＳＳＳランク。デバイス所持を確認……」

高い魔力の所持者と判断したレウスは、相手の出方を窺う為、ビーム砲で威嚇射撃をした。

「ッ！？ユニコーン！」

ドガァァン！！

龍聖は爆煙に包まれる。

「……む！」

軈て爆煙が収まると、そこにはユニコーンガンダムに姿を変えた龍聖が居た。そしてレウスに向かって、問い掛ける。

「お前は誰だ！？マリーダ・クルスか！？」
「（マリーダ？）」

知らない名前を言われ、レウスは首を傾げる。
だが直ぐに頭を切替え、右腕部からビームサーベルを引き抜き、翠色の刃を展開する。そして、スラスターを噴かして龍聖に斬り掛かった。

「くっ！」

ビームと魔力の混合刃が自分に当たる直前に、龍聖は後方へ飛び上がり、攻撃を躱す。
レウスはビーム砲で追撃するが、即座に体を反らした龍聖はビームを躱した。

「（直撃コースを躱したのか…）」
「止めろ！こちらに戦闘意思は無い！」

龍聖は武器を持たずに叫んだ。龍聖からすれば、襲われる理由は1つを除いてどこにも無い。それに戦闘意思も持ち合わせていなかった。

「ならば俺と来い」
「（男…！？）どう言う事だ？」
「お前と、お前の持つデバイスを管理局に渡す訳には行かない」

もしやと思い、相手の名を確めるが、別人だった事に若干驚きを見せる。
そして、レウスも自分達と同タイプで未確認のデバイスを持つ者を

発見した事で、捕獲対象（仮）にした。
何故（仮）なのか？それは、例え同タイプで未確認と言えど、１００％の保証は無いのだ。
龍聖の方は、レウスの言葉に他意を感じていた。

「…それだけか？」
「……」
「目的は何だ！？答えろ！」
「…ファンネル」

レウスは問答無用とばかりに、ウィングバインダーの裏に装備された小型のビット兵器［ファンネル］を自分の周囲に展開した。円錐状のその物体は、脳波でコントロールされる［サイコミュ・デバイス］と呼ばれる物。数は確認できただけで１２機だった。

「ファンネル！？」
［マスター、向こうはやる気です！］
「解ってる。けど…」

後ろを見ると、先程まで居た田舎街が見える。

「（ここで戦ったら、街に被害が……なら！）」
「…行け」

レウスの指示でファンネルが一斉に動き出す。
３６０度のオールレンジを取り囲み、龍聖を包囲する。そして、１つ１つの小型ビットがタイミングを合わせたり、少しずらしたりしながらのビームを放つ。
普通なら躱そうと慌てるのだが……

「ウォォォォ！！」
「なっ！？」
龍聖は、背部スラスターを全開に噴かして突っ込んで来た。その加速性能は、レウスの予測した以上だった。
「（速い！）ッ！」
サーベルを展開して迎え伐とうとしたが、懐に飛び込まれ両手を押さえられた。更に……
ギギギギ……バキャッ！
「何！？」
掴まれた右手が、サーベル諸とも龍聖に握り潰されてしまった。だが、シンクロアーマーとのシンクロ率が低いのか、それともシンクロアーマーでは無いのか、レウスは痛みを感じる様子を見せなかった。
「ここから……ここから、出て行けぇぇぇぇ！！」
「（こいつ！）」
次々に樹木を薙ぎ倒し、龍聖はレウスを押し出して行く。１５ｋｍ程押し出されたが、何とか龍聖を振り解き、体勢を立て直す。龍聖は地面に着地した。
「……ユニコーン、ガトリングガンとシールドを」
［Ｒｏｇｅｒ］
「（奴のデバイス……並のデバイスではない。やはり奴が……）」

龍聖はビームガトリングガンと、専用シールドを装備した。
そして、潰された右手を見たレウスは確信する。
目の前の男がターゲットであると。

「（ならば……大佐の為にも！）」

レウスはビーム砲で狙い撃つ。龍聖は攻撃を躱し、ビームガトリングガンの銃口を向けるが……。

「……ッ！」
［マスター！？何故撃たないのです！？］

龍聖は、トリガーを引けなかった。人を殺してしまうかもしれぬ恐怖、それが先立ってしまうのだ。
非殺傷設定があるのは解っているのだが、頭で解っていても実際に銃を向けると簡単に撃つ事ができない。自分が持っている物は玩具ではなく、本物の兵器。使い方次第で命を簡単に奪える物だ。それを易々と使う事は、龍聖はにできなかった。

「俺は……」
「（ん？何だ？）ファンネル」

銃口を向けたまま動きを止めた龍聖を見て、レウスは疑問を感じるが、大して気にも止めずにファンネルを展開し、包囲網を作った。殺気を感じた龍聖は、咄嗟にスラスターを噴かして飛び上がる。コンマ２秒遅れて先程立っていた場所に、数本のビームが槍の様に地面に突き刺さる。動くのが遅れていたら、自分は間違い無くビームに串刺しにされていただろうと思い、龍聖は冷や汗を流した。

［マスター、何もしなければ殺されます！応戦して下さい！］
「解ってる。解ってるけど……！」

ビームガトリングガンを持つ右手が震えている。『頭で解っていても、体は正直』とは正にこの事だろうと龍聖は思った。だが、怖いからと言って引き金を引かなければ、いづれ殺される事も肌で感じ取れていた。そして自分が迷っている間にも、ファンネルは自分を包囲しようとしているのも解った。

「ッ！？」

体を左へ捻りながらスラスターを噴かすと、さっきまで居た場所をビームが十字を描く様に交差する。

ファンネルを通じて放たれる殺気に、最早選択の余地は無いと感じた龍聖は、遂に引き金を引いた。４連装の銃身が高速回転を始め、コンマ５秒も経たない内に魔力とメガ粒子が混合した緑色のビーム弾が高速で撃ち出される。クシャトリヤへ殺到して行くそれは、空から降り注ぐ光のシャワーの如く幻想的に見えた。

だが、ビームは１発も命中する事は無かった。クシャトリヤのバインダーや脚部に装備されたバーニアスラスターを巧みに操り、レウスは殺到するビームを悉く躱していた。バインダー等のスラスターによって、その巨体からは想像も付かない機動力が生み出されていた。

「（何なんだ？こいつは）」

レウスは、龍聖の行動に不可解さを感じていた。デバイスを持つ者ならば、非殺傷設定がある為に武器を向けたら大抵は応戦して来

るものだ。だが、龍聖の行動は違う。まるで質量兵器を初めて人に向けた様な仕草だった。

「ハァ……ハァ……」

龍聖は、知らず知らずの内に息が上がっていた。心臓は強く波打ち、何も考えられなくなっていたが、自分は引き金を引いたと言う事だけは、ハッキリと解っていた。

「マスター、次が来ます！」

「くっ！」

龍聖は歯を食い縛り、ガトリングガンの銃口を向けつつ急上昇した。すると、足の下をファンネルから放たれたビームが交差した。上昇と共に、龍聖はトリガーを引く。再び火を噴いたガトリングガンのビームは、レウスを撃ち砕かんと殺到して行く。例え当たらずとも、龍聖は狙いを外す事はなかった。

「こいつは一体何んだ？撃つのを躊躇う様な仕草をしたと思いきや、突然撃ち始める。こいつの感情は目茶苦茶だ」

レウスは、龍聖の感情を何となく感じていた。初めての戦闘による戸惑いの様な感情や恐怖、興奮などの感情が入り雑じり、目茶苦茶になっているのが解るのだ。

だが、それによって相手が素人である事も解ったが、能力が未知数である為、相手の出方を窺いながら戦わざるを得ない状況でもあった。

「戦い方は確かに素人だが、あの動き……こちらの攻撃を読んでいるのか？」

「俺は、死ねない……。こんな所で…！」

レウスが言う様に、龍聖はファンネルの攻撃を変則的な動きで躱すか、シールドで防御している為、被弾していない。

しかも、レウスがビームガトリングガンの攻撃に対して回避運動を執っていると言う事は、龍聖の射撃が正確である事を示しているのである。

「（ファンネルの動きは何となく解るけど、俺の移動先を読まれる訳には行かない……。兎に角動くんだ……！）」

龍聖は回避に専念しながら撃っているが、正直避けるので精一杯の状態だった。スピードとシールドで被弾は避けているものの、動きが読まれるのも時間の問題であった。

そんな龍聖を嘲笑うかの様に、ファンネルは前後左右上下とあらゆる角度、からビームを放って来る。右からのビームを躱したと思えば、上と後ろからの十字砲火が来る。それを左に避けると、正面にはレウスが回り込んでいた。

「沈め」

「ッ！！」

メガ粒子砲が龍聖に目掛けて放たれる。龍聖にはそれを回避する余力は無く、咄嗟にシールドを突き出した。すると、シールドがスライド展開し、ビームはシールドの手前で噴水の水の様に拡散して消えた。

「あれは、Ｉフィールドか！？」

シールドに装備されたジェネレーターから展開されたＩフィールドがビームに干渉し、直撃を防いだのだ。ファンネルを防いだ時は一瞬であった為、Ｉフィールドの存在に気付けなかったのだ。

「ビームに対しての防御は硬いと言う事か……」

「ハァ…ハァ……何とか防せげたか…」

Ｉフィールドがあるならば、射撃による攻撃は余り効果が無いと判断したレウスは、袖口からビームサーベルを引き抜く。そして黄緑色の刃を展開し、龍聖に斬り掛かって来た。

「サーベル！？不味い！」

龍聖も右腕のサーベルラックからビームサーベルを左手に装備し、受身を取った。

バチィィッ！！

ビームサーベルがぶつかり合い、互いに反発し合った粒子の束が強いスパークを発生させる。その強烈な閃光は、まるで雷の様だった。

龍聖は少々圧され気味だった。元々右利きであり、左腕にシールドを着けたままの格闘戦は、今の龍聖には重荷なのだ。だが、持ち替える余裕も無い為、このまま続ける他なかった。

「このままじゃ、殺られる」

［マスター、距離を取って下さい！］

スラスターを噴かして、龍聖は一旦距離を取る。レウスも後方に

下がった。そして、両者は互いにサーベルを振り翳し、再び接近戦を始めた。斬り結んだビームサーベルが閃光が、辺りを照した。

龍聖にとって、これが初めてのサーベル同士の戦い。気を抜けば、瞬く間に斬り殺される戦いに、龍聖は反射神経だけを頼りにビームサーベルを振るう。

接近戦では、両者共ほぼ互角の様であった。互いに一歩も退かず、強烈な閃光を空に輝やかせた。

「（原作やアニメもそうだったけど、やっぱりクシャトリヤは強い…！気を抜けば殺られる…！）」

「（接近戦はそれなりに出来る様だな…。素人しては良くやる…）」

相手を評価しつつ、戦闘に意識を集中させる2人。

戦闘は長引きつつあった。

すると、龍聖は自分の装甲の隙間が赤く輝き始めた事に気付いた。

「ん？ＮＴ－Ｄが！？」

情報漏洩を防ぐ為に封印した筈のシステムが、勝手に機動し始めたのだ。それに伴い、視界に映るモニターが変化を始める。だが、システムに気を取られ、龍聖は隙を作ってしまった。

「……貰う！」

隙を見たレウスは龍聖の背後に回り込み、突撃する。それに気付いた龍聖は、振り向いて応戦しようとしたが……

ガシッ

クシャトリヤのバインダーの裏に装備された［隠し腕］に捕まってしまった。

「しまった！」

両手を塞がれた龍聖は、咄嗟に頭部バルカン砲で応戦するが……

ドゴォッ！

「がはっ！？」

［マスター！］

腹部に拳を打ち込まれ、動きが止まってしまう。

更に追い討ちとばかりに、サーベルを突き立てようとするレウス。

龍聖は躱そうとするが、頭を掠める。そして……

「墜ちろ！」

ドガァッ！！

「ッ！？」

頭部に強烈な拳が打ち降ろされた。

ドゴォォォン！！！

龍聖は地面に叩き付けられ、バウンドしながら転がって行く。想像を絶する痛みと衝撃が龍聖を襲った。

「……ぅぅ…ぐ……」

叩き付けられたダメージで龍聖は気を失い、ＢＪ（バリアジャケット）が解けてしまった。

［マスター！マスター！しっかりして下さい！］

「……」

ユニコーンは必死に呼び掛けたが、龍聖は答えられなかった。完全に気絶してしまったのだ。

「手間を取らせてくれる……」

レウスは、龍聖を確保するべく近付いた時だった。

突然、桃色の閃光が自分の行く手を阻んだ。

「！？」

「時空管理局です！大人しく武器を捨てて投降して下さい！」

振り向くと、そこには機動六課の隊長陣が武器を構えて居た。

「時空、管理局」

すると、管理局の名を呟いたレウスの瞳が、憎しみの色に変わる。表情はマスクの下に隠れていて解らないが、強烈な殺気が静かに放たれていた。

「こいつが襲撃犯か。確かにゴーレムの様だな」

「へっ！どうせ図体だけだろ！」

「油断しないで、ヴィータちゃん」

なのは達にとって、初めてのＭＳとの対決となるかもしれぬ状況。互いの間に緊張が走る。
レウスは動きを見せないが、その目は獲物に狙いを定めた豹の様だった。何の動きも見せない相手に、なのは達はそれぞれ武器を構える。

「なのは！あそこ！」

すると、フェイトが何かに気付いたらしい。フェイトが指差した方を見ると、人が倒れていた。しかも、頭から血を流して気絶している様だ。

「人が！　フェイトちゃん、あの人をお願い。ここは私達に任せて」
「解った」
「（行かせん！）」

フェイトが龍聖の下へ行こうとした時だった。レウスは行く手を塞ぐべくファンネルを展開し、なのは達を牽制した。

「な、何だ！？」
「ブラスタービット！？」
「だが、この数は！？」

驚くなのは達を他所に、ファンネルは縦横無尽に動き回り、オールレンジ攻撃を始めた。
前後左右上下、あらゆる角度からビームが放たれる。それは、なのは達の逃げ道を塞ぐ網の様であった。

「くそぉ！厄介な武器使いやがって！」

「は、速い！」
「テスタロッサ、後ろだ！」
ファンネルに翻弄され、思う様に戦えないフェイト達は、防戦一方になっていた。攻撃を仕掛けようにも、近付けばビームに行く手を阻まれ、砲撃体勢をとれば妨害される。密集すれば餌食となるのは明白であり、只管単独で避け続ける以外方法がない状況だった。
「ディバイィィィン　……バスター！！」
「遅い…」
苦し紛れになのはが砲撃を放つが、レウスに当たる事はなかった。録な照準もつけられていない砲撃は、レウスの右横を素通りして行った。
その砲撃に対して、レウスは胸部拡散ビーム砲で反撃をした。
「ぐぅ！」
「何て威力だ！」
「強い……あれを真面に受けたら…」
シグナム達は何とか防御に成功したが、想像以上の威力に驚愕する。
距離が開いていたとはいえ、拡散したビームの1つ1つの威力はS＋に相当し、収束すればSSS－に匹敵する。もし並の局員であったら、容易く貫通される威力なのだ。
「（管理局……だが今は）」
レウスは任務遂行の為、龍聖の確保に向かおうとしたその時だった。

「ウィングロード！」
「何！？」

突然、青い道が空へと伸び、その上を龍聖を担いだスバルが走り抜ける。

「（しまった！伏兵か！）
ッ！？」
「ウォォォォ！！」

それを追い掛けようとするレウスを、エリオは真下から強襲した。瞬間加速に任せた刃が迫るが、レウスはそれを素早く躱す。

「クロスファイア　……シュート！！」
「フリード！ブラスト・レイ！」

すると、回避位置を予測したティアナとキャロの追撃が来る。レウスはティアナの魔力弾に対し、ファンネルで応戦。フリードの火球にはビーム砲で対処した事で全てを相殺した。
所がその隙に、龍聖はヘリに収容されてしまった。

「おのれ……！」
「ハァァァ！！」
「紫電一閃！！」

レウスがヘリに気を取られた隙を見て、フェイトとシグナムは左右から同時攻撃を仕掛けた。防御するより避けた方が良いと判断したレウスは、急上昇をして躱すが…

「ラケーテン……ハンマー！！」

続けてヴィータの追撃が来た。レウスは、咄嗟に左腕でハンマーの柄の部分を受け止め、そのまま力任せに弾き飛ばす。

「ディバィィィィン　……バスター！！」

それによって動きを止めたレウスに、なのはの砲撃が撃ち込まれる。だが、それは巨体に似合わぬ機動力で躱されてしまう。

一旦距離をおき、レウスは体勢を立て直した。

「（……やむを得ん。一時撤退だ）」

これ以上の戦闘は無意味と判断したレウスは、展開中のファンネルをバインダーに戻し、戦闘区域を離脱した。

「撤退したのか」

「デカイ癖に、なんて速さだ」

最大加速で戦闘区域を離脱したレウスの姿は、最早どこにも見えなかった。追跡しようにも、ミノフスキー粒子のジャミングによって、探知不能だった。

「あのスピード……私と同等か、それ以上かも……」

「……取敢ず、一度戻ろうか」

深追いは危険と判断したなのは達は、ヘリに戻る。そこへＦＷ陣が出迎えた。

「なのはさん！」

「大丈夫ですか？」
「皆、ありがとう」
「エリオもキャロも、お陰で助かったよ」
「い、いえ」
「フェイトさん達が無事で良かったです」

それぞれが自分の部下を誉めた。

「それで、さっきの人の具合は？」
「はい。あそこに」

エリオとキャロに案内されたなのは達は、頭に包帯を巻いた龍聖の傍に寄る。　龍聖の方は、目覚める様子を見せなかった。

「一応、応急措置はしたんですけど……」
「意識は戻らないままで……」
「ならば六課に戻って、シャマルに見て貰おう」
『はい』

シグナムの言葉に同意すると、エリオとキャロは座席へ戻った。
すると、フェイトが何かに気付いた様だ。

「あれ？」
「フェイトちゃん、どうしたの？」
「なのは、これ見て」

フェイトが、龍聖の右腕にある白銀のブレスレットを指差す。

「これって……デバイス、だよね？」
「多分……」

金属製のブレスレットを見て、２人は思い始めた。
この青年は、先程のゴーレムと戦っていたのではないか、と……
守護者と少女達の出会いは訪れた。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ５　獣と巨兵と　（改）（後書き）

今回は、ＮＴ－Ｄシステムの発動はありませんでしたが、第２回戦では必ず出します。

フル・フロンタルの戦いのタイミングは……まだ決まっていません（－－；）

ですが、必ず出しますので少々お待ち下さい。

次回も宜しくお願いします！

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ６　法と守護者（前書き）

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ６が完成しました。今回は、機動六課との絡みになります。

それではお楽しみ下さい！

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ６　法と守護者

龍聖が機動六課に収容されてから１時間、レウスはフロンタルと連絡を取っていた。

≪そうか……。目標と思われる人物が管理局の手に……≫

「申し訳ありません、大佐。全ては自分の責任です」

レウスは、自分の力不足を悔いながら謝った。だが、フロンタルは怒る様子を見せなかった。

≪気にする事はない。君が接触した管理局の部隊は、［機動六課］に間違いないだろう≫

「はい」

≪あれは正に特殊部隊と言えるものだ。並の魔導師達ではない≫

「解っております。大佐、先程戦闘した男と、未確認デバイスデータを送りました。如何ですか？」

フロンタルは、レウスから送られたデータを読む。すると、突然怪しげな笑みを浮かべる。

≪フフフ……レウス大尉、君の思った通りだよ。この青年こそが、我々の探している人物だ≫

「では、奴が…」

≪そうだ。彼こそが箱の守護者であり、そのデバイスこそが箱の鍵……ユニコーンガンダムだ≫

「ならば、直ぐに確保致します」

レウスは即座に行動を起こそうとしたが、フロンタルはそれを止める言葉を掛けた。
≪待ちたまえ。ガンダムの性能が私の知る通りなら、管理局が正体に気付く事はない。アレのセキュリティは、鉄壁その物だからな≫
「…了解しました。では、自分は監視に専念します」
≪そうしてくれ。迂闊に手を出す必要はない≫
「はっ！」
レウスは敬礼して通信を切ると、機動六課を目指して飛翔した。

ー機動六課ー

隊長室では、はやてとシャーリーが話し合いをしていた。
「救助した人の容態はどうや？」
「はい、まだ目覚めていません」
「そうかぁ。なら、デバイスの方はどうやった？」
「それが……」
シャーリーは突然口ごもる。何だか言い難そうな感じだった。
「どないしたん？」
「……デバイスを調べようとしたら、こちらのシステムが全てダウ

ンしてしまうんです」
「何やて！？」
はやてはその言葉に驚愕した。その様な事が起こるなど、想定していなかったのだ。
「最初はフリーズする程度だったんですが、何回かアクセスする内に逆ハックを受けて……」
「逆ハックって……そのデバイスがやったんか……？」
はやてが信じられないのも無理もない。
セキュリティの硬いデバイスは存在するが、逆ハッキングをするデバイスなど前例が無いのだ。しかも、次元世界で高い技術力を持つ管理局のシステムを逆ハッキングしたとなれば、そのデバイスの演算能力は管理局のシステムを上回っている事になる。
「はい。ここまで外部からの干渉を拒むデバイスは初めてです」
「……なら、彼が目覚めた時、直接聞く以外あらへんな……」

―医務室―

「…うぅ…ん？ここは……？」
漸く目覚めた龍聖が辺りを見ると、全く見知らぬ部屋に居る事に気付いた。薬品などの匂いから、医務室らしい事は解った。

「気が付いたのね。良かった」
「ッ！？」

龍聖は突然聞こえた女性の声に驚いて左を向くと、そこには金髪の女性が立っており、こちらに笑いかけていた。

「あの……大丈夫？」
「ッ！　あ、あぁ……ここはどこだ？」

まだ整理の着かない頭を何とか抑え、平然を装い気付かれない様にした。

「ここは時空管理局、機動六課の医務室よ。私はシャマル」
「管理局、だと……？（俺は、捕まったのか？）」

容疑者として管理局に捕まったのでは、と思った龍聖は立ち上がろうとしたが、突然頭がふらついてよろけてしまった。
倒れそうになった体を、シャマルと名乗った女性が支えてくれた。

「無茶しないで、貴方は怪我してるのよ」
「（あいつにやられた時の傷か……）」

龍聖は額に巻かれた包帯に手を触れる。少し痛みが残るが、大事に至る程ではないと思った。だが患者である事は変わらず、シャマルにベッドに座らされた。

「今はゆっくりしてて。私、ちょっと行って来るけど、直ぐ戻るわ」
「ああ…」

シャマルが部屋を出た後、龍聖は辺りを見渡す。
すると、近くのテーブルに自分の持ち物が置かれてあり、全てを調べた。

「……やっぱり」

だが、その中に相棒のユニコーンガンダムの姿はなかった。龍聖は状況から見て、管理局に持って行かれたのだと確心する。

「（……大丈夫だ。相棒のセキュリティは鉄壁だ。でも……ユニコーン、無事でいてくれ）」

信頼と心配が、同時に龍聖の心を揺るがす。
すると、誰かが部屋に入って来た。
1人はシャマル、そして一緒に入って来たのは、茶髪にサイドテールの女性と、長い金髪の女性だった。

「気が付いたんだね」
「怪我は大丈夫？」
「……大丈夫だ」

どうやら管理局員らしい彼女達を前に、龍聖は警戒心を強めるが、怪しまれない様にポーカーフェイスでいるしかなかった。

「えぇっと、御劔龍聖君だよね？」
「ああ…」
「余り驚かないんだね」
「大方、俺の免許証を見たんだろ？　入れた時と向きが逆だった」

これは、私物を確かめた時に解った事だ。

「ゴメンね、勝手に見て。私は高町なのは」
「フェイト・T・ハラオウンです」
「そんな事より、俺の相棒をどこへやった？」

龍聖は、少々睨み付けながら聞いた。今の彼には自己紹介よりも、ユニコーンの方が大事だった。

「ああ、ゴメンね。この子だよね？」

フェイトからブレスレットを受け取る。直ぐに右腕に装着すると、ユニコーンに声を掛けた。

「大丈夫か？相棒」
［はい、マスター。ご心配をおかけしました］
「喋った！？」
「もしかして、インテリジェントデバイス？」

フェイト達が驚くのも無理もない。今まで何の反応も示さなかったデバイスが、主の下へ帰ったら突然喋ったのだから。
当の龍聖は、自分が気絶している間に何をされたのか解らない為、かなり心配していた。

「本当か？　変な事されてないか？」
「へ、変な事って」
［貴女方は、私の中を勝手に覗こうとしました。これは立派な痴漢行為です］
「ち、痴漢！？　私達はそんな［勝手に覗く事が痴漢以外の何だと言うのですか？］う〝っ」

ユニコーンはかなり御立腹の様だっだ。なのは達が、何も言い返せなくなる程に。
近くで見ていたシャマルも、目を丸くしていた。まさかデバイスにここまで言われると、誰が予測できるだろうか。

「俺も、パートナーとして見過ごせないな」
『ごめんなさい』

なのはとフェイトは、場の空気に流される様に謝った。

＞マスター、機密保持は大丈夫です。管理局のシステムなんて、私からすれば赤ん坊の様な物です＜
「＞そうか。凄いんだな、お前＜……さてと」

龍聖はベッドから立ち上がり、ハンガーに架けられていた自分のジャケットを羽織る。

「えっ？　どこ行くの？」
「出て行くだけさ。助けてくれた事には感謝している」
「出て行くって、その怪我で！？」
「大した事無い。こんな掠り傷」
「でも安静は必要よ」
「俺は大丈夫だ」

怪我人と言う事もあり、なのは達は龍聖を引き留める。しかし、龍聖としては一刻も早くここを出たかったのだが、なのはが立ち塞がった。

「待って、その前に聞きたい事があるの。話してくれるかな？」
「話す事は何も無い。どいてくれ」

「なら、私達の部隊長から話があるの。少しで良いから聞いて欲しいの、お願い」
「嫌だ」

―部隊長室―

その後、説得の末に龍聖は渋々承諾し、部隊長室にやって来た。

「初めましてやね、御劔龍聖君。私が機動六課部隊長の八神はやてや」
「私はライトニング分隊、副隊長のシグナムだ」
「スターズ分隊、副隊長のヴィータだ」
「俺はザフィーラだ」
「犬が……喋った」

ここには隊長陣だけではなく、付き添いのシャマルとヴォルケンリッターの最後の1人、ザフィーラも居た。
狼形態のザフィーラが喋った為に、龍聖は面食らっていた。動物が喋るなど、物語の中だけだと思っていた龍聖からすれば、当然の反応だった。
「俺は犬ではない。狼だ」

「そうなのか……すまない。……俺は龍聖だ」

一通り自己紹介を終えると、龍聖は周囲に視線を走らせた。普通にしている様だが、彼女達が自分に対して警戒心を向けている事が解る。そして意外性を感じた事が1つ、それは部隊長と名乗った女性が自分と同年代に見える事だ。部隊長ともなれば、もっと年上を想定していた龍聖からすれば、驚きの事実である。

「まず聞きたいんやけど、龍聖君はここがどこか解っとるん？」
「月が2つ見える時点で、地球じゃないって事は直ぐに解った」
「結構落ち着いてるんやね」
「慌てて何とかなった試しは無いからな」

龍聖は、条件反射の様にスラスラ答えていった。予め答えを用意していた訳ではないが、普通ならこう答えるであろう答えを瞬時に考えて答えているのだ。

迂闊な事を言って怪しまれる訳には行かない。何より、自分が転生者で［ラプラスの箱］の守護者であるなど、口が裂けても言えなかった。

「成る程、肝が座っとるんやね。ここはミッドチルダと言って、地球とは違う別の世界なんや。後、龍聖君は魔法って信じとるか？」
「現物を見たから、問題ない」
「ほんなら話は早いで。じゃあ次の質問や。龍聖君は、時空管理局って知ってるか？」
「警察みたいな物だろ」
「大体はそうや。ほんなら、管理局について説明しとくな。管理局と言うのは―」

はやては管理局について説明を始めた。説明を聞きつつ、龍聖は

既に自分が得ている情報と、はやての説明を照らし合わせながら、情報を整理していた。

そもそも時空管理局と言うのは、いくつも存在する次元世界を管理し、犯罪者などを取締り、平和を守る組織である。それと同時に古代の遺失物、通称ロストロギアを回収し、管理する事である。

更に管理局法と言う法律を作り、法を定めている為、政府より強い権限を持つ組織となっている。

つまりは、警察と軍と司法が1つになった組織なのである。

「とまぁ、こんな所や」

「そうか……（本当にそんなやり方で良いのか？）」

龍聖がそう感じる理由はいくつかある。1つはロストロギアの回収である。

遺失物ロストロギアは、所謂『世界遺産』と言っても過言ではない。また、回収と言ってもそのロストロギアが誰かの、又は世界にとって大切な物だったらどうするのか？危険だと言って言いくるめるのか？　又は、武力で無理矢理奪うのか？もしそうならば、それは『回収』と言う名の『強奪』である。

そして、管理局はロストロギアを集める事で自分達の力にして、独占しようとしているのではないか、と言う疑念も沸く。

「（世界を管理する事による平和……神にでもなったつもりか？）」

もう1つは、世界を管理すると言う事である。

平和と言っても、これは管理局に創られた平和であって、自分達

で得た物ではない。
管理される前は、独自のやり方や文化があったはず。それを行き成り現れた管理局に、『自分達が管理して平和にしてやるからやり方を合わせろ』などと言われて、受け入れられるのか？管理される側の人間はどう思うのか？本当にその管理を受入れているのか？

しかも、管理世界にするのは魔法文明が存在する世界のみで、地球などは管理外世界と見なされている。それに、管理世界にしたからと言って、全てがプラスになる訳ではない。
更に『管理』とは、言い変えれば『支配』と同意義なのである。彼女達は、それを解って言っているのか？

「（いや、全く解っていない……管理を当然の様に捉えている）」

龍聖には、はやての言葉は常識を説明している様にしか聞こえなかった。
話を聞くに連れて、表情が固くなっていた龍聖に、フェイトが声を掛けた。

「難しい顔してるけど、何か解らない所があった？」
「いや……（呆れてるだけだよ）」
「ほんなら龍聖君、うちら管理局にはもう1つ仕事があってな、それは龍聖君みたいに時々別の世界に迷い込む人、『次元漂流者』を保護する事なんや」
「龍聖君は地球出身でしょ？」
「ああ（別のな）」

龍聖にとって、この世界の地球へ行っても帰る所など無いのだ。例え元の世界に戻った所で、自分は既に死人扱いになっているだろうから、居場所はどこにも無いと言って良い。

「だから、龍聖君を機動六課で保護する事になるんや」
「……保護？違うだろ？ハッキリ言ったらどうなんだ？」
「何の事や？」
「俺を保護すると言うのは只の御題目。本当の目的は、別にあるんじゃないのか？」

龍聖には、はやての目論見が薄々解っていた。自分に告げられるであろう言葉を予測し、カマを掛けてみたのだ。

「…何故そう思うんや？」
「俺が地球出身だと解っているなら、さっさと送り返せば良いだけの事。保護は、俺がここに居る時点で既に成立している。また「保護する」と言って態々遠回りするのは、別な目的があるからだ」

龍聖の鋭い目に、はやては等々観念した。

「……思ったより鋭いんやね。龍聖君の言う通りや」
「……」
「……実はな、龍聖君に機動六課に入って欲しいんよ」
『！？』

その言葉に、龍聖とシャマル以外は驚く。龍聖はやはりな、と言う目をしていた。

「龍聖君はあの４枚羽根のゴーレム、いやロボットやな……あれと戦ったんやろ？」
「行き成り襲い掛かって来たから、防戦したまでだ」

はやてがクシャトリアの特徴を知っているのは、なのは達の報告

とＦＷ陣が遠くから撮した画質の酷い映像による物だった。
実は今回、機動六課が戦闘に乱入できたのは、ミノフスキー粒子によるレーダー干渉を逸早く感知した事と、龍聖とレウスの戦いが長引いた事による物だ。

未知の相手にＦＷ陣は危険と判断し、隊長陣だけで挑んだ所に頭部から血を流して倒れている龍聖を発見した。
だが、隊長陣がファンネルに苦戦して動けなくなり、ＦＷは地上から龍聖の救出に向かい、レウスに不意討ちをしたのである。

「やっぱり龍聖君やったんやね。……それでな、今管理局では謎のテロリスト集団、さっきのロボット達の攻撃で何十人もの被害者が出てるんや。謎のジャミングでこちらも不利になっとるし……」
「（ミノフスキー粒子の影響か……）」

ミノフスキー粒子はレーダー類や通信を妨害する力があるが、完全ではない。
散布領域内の濃度によってはレーダーは駄目でも、通信は大丈夫と言うケースがある。
また、カメラの場合はデジカメなどの電子機器にも影響を与える為、デバイスなどのカメラにも影響を与えてしまう。更にかなりの微粒子である為、発見は困難である。
余談だが、粒子が見つかったのはＵ．Ｃ．００６９、一年戦争の十年前である。

「……後な龍聖君、次元漂流者はデバイスを持ったらアカンのや。せやから「管理局に入れば免除されるって事だろ」！？…そうや」

言わぬ先に言われ、はやては少し驚く。
龍聖は、はやてが何故自分を欲しがるのかが大体解っていた。ま

ず考えられるのは、自分の魔力である。ＳＳＳと言う上位ランクの魔力を持っていれば、管理局が欲しがるのは当然と言える。その根拠は、管理局の致命的な『弱点』によるものだ。

その弱点とは、『人手不足』である。管理局は自分達の法律で『質量兵器』、つまりは銃やミサイルなどの使用を禁止している。その理由は、魔法と違って誰にでも扱える兵器であり、野蛮だと言うのが理由だ。　その点、魔法は非殺傷設定が使えるクリーンな力と言うのが、管理局の考えである。その為、管理世界では質量兵器の使用を禁止している。それにより、魔力を持たない者は戦う力を失った。

だがその結果、戦える者は魔力を持つ者のみとなった。更に、魔力を持つ人間が持たない人間より少ない上に、多くの世界を管理世界にしてきた結果、手が回らなくなると言う事態が発生したのだ。
以前に見た人体実験も、元は人手不足を補う為であった。だがそのやり方は、とても賛同できる物ではない。そもそもこの様な結果になったのは、管理局が矢鱈と手を伸ばし過ぎたツケが回ってきたからなのだ。

龍聖から見れば、この現状は自業自得なのだ。

「俺はお断りだ」
「私もお断りです」
「喋りやがった！？」
「インテリジェントデバイスなのか？」

ユニコーンが行き成り喋った事にヴィータ達は驚いた。

「…どうしてや？」

「俺はお前達が信用できない」
「何で信用できへんのや？」
「お前達は勝手に相棒を調べようとした。俺は、勝手に自分の物を弄られるのが嫌いなんだ」

これは本音でもあるが、一番の理由はユニコーンと自分の正体がバレるかもしれないからだ。

「それについては謝る。龍聖君はそのデバイス……えぇっと」
「ＲＸ－０だ」

龍聖は咄嗟に型式番号を答えた。これは、名前から正体を割られない様にする為の処置であった。

＞ＲＸ－０？　変わった名前だね＜
＞そうだね。でも、クロノ君のＳ２Ｕみたいな物じゃないかな？＜
＞成る程＜
［（変わった名前で悪かったですね。これは私の型式番号ですよ！）］

フェイトとなのはの念話は、ユニコーンに筒抜けであった。

「ＲＸ－０をどこで手に入れたんや？」
「気が付いたら一緒に居た」
「そうなんか、でも龍聖君、そのデバイスには危険が無いか調べなアカンのや。だから、調べさせてくれるか？」
［私はマスター以外にアクセス権を絶対与えません。それに、マスターから引き離すのであれば、私は機密保持の為に自爆を選択します］
『！？』

「なっ！？」

龍聖以外は、ユニコーンの自爆宣言に驚いた。

「相棒……なら、俺も付き合うよ」

［マスター！？］

「龍聖！？」

「俺はお前のパートナーだ。一緒に居るって言っただろ？　だから、死ぬも生きるも一緒だ」

［マスター／／／］

この短期間の間に、彼らの絆は強くなっていた。

＞なんか、さっきと表情が違うね＜

＞うん。何だか、柔らかいね＜

なのはとフェイトは、龍聖が自分達に向ける表情と、デバイスに向ける表情が全く違う事に気付いた。

「……解った。デバイスには手を出さん事を約束する。でも、私は龍聖君の力を貸して欲しいんや」

「絶対嫌だね」

自分やユニコーンが利用される事だけは絶対に避けたかった。龍聖は席を立ち、扉へと向かう。

「待て、どこへ行く？」

「ここを出て行くだけさ。地球へ戻ってもつまらないし、この世界を旅するのも悪くない」

「ちょっと待って、龍聖」

龍聖は、そそくさと部屋を出て行った。それを追い、フェイトも退室する。
残ったメンバーは、はやてに疑問を投げ掛ける。

「……」
「はやてちゃん、どうして龍聖君を機動六課に…？」
「さっき、シャマルから龍聖君のリンカーコアについて話を聞いたんよ」
「あいつのリンカーコア？」
「ええ。彼が眠っている時に調べたんだけど、測定の結果、龍聖君のリンカーコアからＳＳＳランクの魔力が検出されたの」
『！？』

シャマルの報告は、全員を驚愕させるのに十分だった。

「何だと？」
「ＳＳＳランク、だと？」
「はやてより、上って事かよ？」

ヴォルケンズが驚くのも無理も無い。
ＳＳＳランクは、六課部隊長のはやてのＳＳより上であり、何よりもＳランクオーバー自体が希少な存在なのである。

「そんなに高い魔力を、龍聖君が……」
「ええ」

ＳＳＳランクなら、はやてが欲しがる理由も納得できる。だが……

「（……魔力もそうやけど……彼は一体何者なんや？）」

はやては、龍聖に疑念を抱いていたのだった。

Ｅｐｉｓｏｒｄｅ６　法と守護者（後書き）

今回は龍聖の分析力と、ユニコーンの感情を出してみました。

上手くできたか解りませんが、次回も宜しくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0498t/

魔法戦記ガンダムUC

2011年10月9日02時42分発行